

愛知学院大学

教養部紀要

第67巻 第1・2合併号

論文

田 中 泰 賢：『雨月物語』（上田秋成）と『ナイン・ストーリーズ』（サリンジャー）……………（ 1 ）

Heather DOIRON：Working with Silence in the Second Language Classroom……………（ 19 ）

文 嬉眞・金 美淑：日本の大学における教養科目としての「韓国語学習」
——「中級クラス」受講者のアンケート調査結果をもとに——……………（ 25 ）

南部忠明・河野敏宏：来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について……………（ 60 ）

2020

愛知学院大学教養部

『雨月物語』（上田秋成）と 『ナイン・ストーリーズ』（サリンジャー）

田 中 泰 賢

「サリンジャー（Jerome David Salinger, 1919–2010）の父方の祖父は1860年ロシア帝政時代末期のリトアニアに生まれている。12歳の時イギリスに渡り、さらに21歳でアメリカに移住している。ユダヤ教教師（ラビ）および医師になっている」¹⁾。時代は異なるが第2次大戦中、リトアニアの領事館に勤務していた日本の杉原千畝氏はナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人をはじめとした難民たちにビザを発行して多くの人たちの命を救ったことはよく知られている。サリンジャーの祖父がリトアニア出身であり、そのリトアニアで杉原千畝はビザを発行して多くの命を救った。ヒレル・レビン氏は「杉原千畝は普通の人間でも、時に桁はずれの行為を行うことができることを示すことで、私たちを励まし、勇気づけてくれるのです」²⁾と語っている。サリンジャーは作品の中で「公的ではないけれど、シーモアは私たちと一緒にいた31年間ずっと、中国や日本の詩を書いたり、話したりした。」³⁾と語っている。また仏教や日本の禅などに深い関心を示していたサリンジャーと日本、中国との不思議な目に見えない繋がりを覚える。

『サリンジャーと過ごした日々』を翻訳した井上里氏は次のように述べている。

これは Joanna Rakoff, *My Salinger Year* (2014) の全訳である。原題のとおり、著者（ラコフ）がサリンジャーと過ごした一年間を綴ったメモワールだ。出版エージェンシーとは作家の原稿を預かり、代わりに出版社に売り込む会社だが、本書に登場するエージェンシーもマンハッタンに実在する。当時23歳だった著者（ラコフ）は、大学院を修士課程修了後に飛び出したあと、これからどうすればいいのかもわからないまま、職業紹介所で最初に紹介されたこのエージェンシーでアシスタントとして働きはじめる。だが、意外なこと

に、大学院まで進んで文学を研究した著者（ラコフ）は、サリンジャーの作品を一冊も読んだことがなかった。命じられたとおりサリンジャー宛のファンレターに返事を書くうちに、不思議なことが起こる。読んだことも興味もなかった作家への手紙であったにもかかわらず、著者（ラコフ）はその内容に強く惹かれていく。それらはどれも極端に私的で、切実で、時には戸惑ってしまうほど親密な手紙だった。千通近くのファンレターを読んだ頃、とうとう著者はサリンジャー作品を手取る⁴⁾。

そしてラコフは作品を読んでいくうちに、サリンジャーという作家に対して今まで勝手に決め付け、思い込んでいた自分が間違っていたことに気が付いていく。だからこうあるべきだという考えから脱却しようとする。この訳者、井上里氏のコメントは私たちの偏見や染みついた思いを投げ捨てることの難しさを教えてくれる。

サリンジャーの作品『シーモア―序章―』で「幼い男の子は釣った魚の糸を引きよせていると同時に、下唇にひどい痛みを体験した。その後そのことは忘れてしまった。帰宅して依然として生きた状態の魚をお風呂に放した。その魚の先端に男の子の学校のしるしと同じ青い織物の帽子が付いているのに気が付いた。その魚の小さな濡れた帽子の内側に彼のネームが縫いつけられていた」⁵⁾。この箇所は上田秋成（1734-1809）の『雨月物語』（1776）に書かれている「夢応の鯉魚」を思い出させる。鯉の絵が得意な僧侶の話である。その僧が病気になって、七日寝込んだ後亡くなった。体が少し暖かいので三日間様子を見ていたら、僧は生き返って不思議なことを語り出した。湖の神がこの僧の放生の功德を認め、泳げる鯉の服を授けてくださった。湖の神から釣り糸にかからないようにと注意を受けた。楽しく泳いでいたが、腹が減ってきて餌を飲み込んでしまった。僧はその釣り人を知っていたので叫んだが知らん顔であった。まな板の上でその僧が切られようとした時、夢がさめたという。村田昇氏によるとこの夢応の鯉魚は「醍醐天皇の頃天台宗三井寺に住した画僧興義についてかいた仏教尊重物語」⁶⁾である。上田秋成のお墓は、京都南禅寺畔の浄土宗西山禅林寺派西福寺内庭にある。「それはそのころ西福寺住持であった玄門和尚と格別の親交があったことによる」⁷⁾。彼の愛妻は剃髪して尼僧となった。名前は湖璉尼といった。

岡本かの子氏は「上田秋成の晩年」という小説を書いている。上田秋成は俳諧、和歌、学問、小説等に精進したのみならず後に煎茶道の中興の祖と仰がれた。この小説は上田秋成が煎茶を楽しみながら妻たちを回顧しているうちに朝になり、南禅寺の修行僧たちの読経の声が聞こえてきたという構成になっている。彼の妻が次のように書かれている。「尼の形になってからのお玉に驚かれたのは、まるで気性の変わって仕舞ったことであつた。いんぎんにまめに自分の面倒を見た若いときの妻の親切というものは、一つも心に留まって居ないのに、綻びて仕

舞ったようになった彼女がただわけもなくときどき自分の眼を見入るその眼を見ると、結婚して以来はじめて了解仕合ったという感じがするのであった」⁸⁾。湖璉尼は寛政9年（1797）12月15日逝去。享年58歳。尼僧になってから7年目であった。

さて、上田秋成の『雨月物語』とアメリカの作家、サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』（1953）を取り上げたい。『雨月物語』及び『ナイン・ストーリーズ』ともに九つの短編から構成されている小説である。時代も国も異なる二人の作家が書いた作品が奇しくも九つの物語から成っている。特に『雨月物語』の最後の話「貧福論」と最初の話「白峯」に注目したい。その理由は板坂則子氏によると「この『雨月物語』の九話は、本来はその順序を入れ換えられるものではなく、一つの話が次の話を生む契機となり、巻末は巻頭につながるといった循環体を構成しており、各話の独立した世界と同時に、『雨月物語』全体として一個の夢幻郷を成している」⁹⁾という。この説に則って、サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』はどうであろうか。最後の話「テディ」と最初の話「バナナフィッシュにうってつけの日」を取り上げて、循環体になっているか検討したい。

『雨月物語』の「貧福論」は経済についての物語である。上田秋成に関する小説論文集の中に次のような記述がある。「参勤交代は貧乏をさせるためにやつたものだといふが、是は間違つた話で、二本さした事のない人間の想像に過ぎない。昔からそんな事を書いた書類を見たことがない。土佐のある侍の話に、我々の藩では殿様のお供で江戸に行く事は一生の間に一度位のものだから、貧乏するどころか、大喜びだつた」¹⁰⁾。参勤交代で人が動く。それに伴って旅館、食事、衣服、交通費、土産等の経済が循環していく。そして旅で人は見聞し、江戸で故郷とは違う有り様を知ったことを帰ってから人々に話していく。文化も循環していく。これは江戸時代の経済活動の一端を示している。

スーザン・B・ハンレー氏はハーバード大学及びエール大学大学院で日本研究をした時、江戸時代の後進性を強調する説や伝統的な経済と急速に工業化した近代日本とを切り離す説に疑問を抱く。それから長い年月にわたり、史料を読み、江戸時代の富の増加と生活水準の向上、資源を有効利用する文化、質素でも健康的な生活、都市の公衆衛生の発達、近代化する家族構成、等をまとめている。例えば「江戸が開かれるよりかなり前でも、大阪では尿尿が周囲の農村で肥料として用いられていた。その大部分は集められて、船に積み込まれ、近隣の農業地域へともたらされた。大阪では、18世紀中頃には、明らかに尿尿は経済的な価値を持つ品物であった」¹¹⁾。尿尿が畑で使用される循環機能が働いていた。そればかりでなく尿尿が経済的価値を持つ品物であった。そこに経済的循環も働いていた。ハンレー氏は終りのところで次のように語っている。

工業化のルーツを明治時代に捜すのではなく、もっと過去に目を向けなくてはならない。二世紀以上にわたって海外からの影響にほとんど門戸を閉ざしていた国が、どうやって大きな人口を抱えながら、比較的乏しい資源で、しかも国際交易なしに、その国民にこれほど高レベルの福祉をもたらすことができたのか、また、それはなぜ可能であったのだろうか、といった点に注意を向けるべきなのである。そこには、資源を有効に利用し、人々に質素ではあるが健康的なライフ・スタイルをもたらし、簡素さのなかに豊かな喜びを見出す文化を創り出した社会があったのである。この社会のこういった側面すべてが近代化に貢献したのは確実である¹²⁾。

『雨月物語』はそのような時代に生まれた作品である。「貧福論」では岡佐内という武士が登場する。この武士はお金持ちになることへの思いが人一倍強く、節約をしたので、家は豊かであった。しかしあまり風流に親しむことはせず、小判を眺めて楽しんでた。だから人々はみんな岡佐内の行いを、味気ない人間だといって嫌った。だが岡佐内に対して軽々しく自分の都合で価値判断をしている人たちに対して、風流だけではなく、お金も大切であることを「貧福論」では語っている。

武士、岡佐内の枕元に黄金の精霊が現われる。仏教では無情説法という言葉がある。金石・土木などの自然物・無生物が常に仏の法を説きつくしている。それらがそのまま仏の法にほかならない。「戒法を受け、大自然の摂理の靈妙さに目覚め、坐禅を中心とした生活を始めるとき、十方世界の、土地も草木も、あるいは石垣や土塀、さらにはかわらけや石ころ、ありとあらゆるものがことごとく仏のありようを示し始めて、それらが発するある種の靈気があちこちに及び、それにふれると、摩訶不思議な仏の恩恵としか言い得ないようなおかげを知らず知らずのうちに受け、親密な（天地いっぱい渾然^{こんぜん}一体となった）さとりのおすがたを示すのである」¹³⁾黄金の精霊が仏の法を説くのである。

黄金の精霊は語る。「武士たちまでが富貴は国のもとであることを忘れ、つまらぬ軍略にばかり熱中して、破壊と殺戮を行い、自分の徳を失って子孫まで絶やしてしまうのですが、それもつまりは財宝を軽んじて名誉を重しとする、その惑いのせいでもあります。思うに名誉をもとめる心も、利をもとめる心も、心はひとつであって、けっしてちがう心が二つあるものではありません。それを学問や書物にとらわれて、金の徳を軽んじては、それでみずから清廉潔白であると自称し、生業を捨て俗世間をのがれて晴耕雨読の生活をしている人を賢人であるというのです。たしかにそういう人自身は賢人かもしれませんが、そういう行為そのものは賢いことではありますまい。金は、七宝の最上位のものであります」¹⁴⁾。道元禅師は「治生産業もとより布施にあらざることなし」と述べている。人を騙すのではなく、人々に喜びを与える産業は社

会を幸せにする。機械のおかげで家庭では洗濯等の労が軽減される。機械は使い方誤らなければ人間を助けてくれる。道元禅師の言葉をそのように理解したい。

黄金の精は語る。「いったい驕奢をほしいままにして治めた世というのは、むかしから長つづきしたためしがありません。人間として守るべきことは儉約ですが、それがあまり行き過ぎるとけちんぼにおちいます。だから、儉約とけちんぼのけじめをよくわきまえてつとめることが大切です」¹⁵⁾。仏陀は「身を健やかにし、一家を榮えさせ、人々を安らかにするには、まず、心をととのえなければならぬ。心をととのえて道を楽しむ思いがあれば、徳はおのずからその身にそなわる。人の心は、ともすればその思い求める方へと傾く」¹⁶⁾と語っている。

朝4時にお寺の梵鐘の音が聞こえて来ると黄金の精は消えていった。岡佐内は黄金の精が「天下万民が安穩に富みさかえ、家ごとに家運の繁栄と世の太平を謳歌することは、近い将来のことです」¹⁷⁾という言葉思い出した。高田衛氏は「この編(『貧福論』)で注目しなければならないのは、片や人、片や人にあらざるものの問答という趣向と、黄金精霊の未来史の予告という形態が、そのまま巻頭の「白峯」に連続することである。もちろん、終章として『雨月物語』全編の大団円としての配慮は十分になされているが、しかも円環的に、九編の独立した主題が連鎖状につながっているということである」¹⁸⁾と述べている。高田氏の論は興味深いものである。

最初の編「白峯」では亡霊が恨み言を言ったのに対して西行法師は「君のおっしゃるところは、やはり醜い人間の欲情・煩惱の域から脱してはおられません」¹⁹⁾と語る。仏教の唯識では「いくら善の行為を積み重ねても、存在それ自体は〈無覆無記〉(善・悪いずれでもないもの)なので、いつ何時でも、悪に変身する可能性をひめていることになります。人間は、限りなく向上の力を秘めているとともに、限りなく転落後退の可能性も持っている」²⁰⁾。だから修行は果てしないものということになる。亡霊はそこに気が付いていない。西行法師は亡霊に「ただただ昔の恨みをお忘れになって、極楽浄土におかえり遊ばすことこそ、心からお願い申し上げたい君の御心でございます」²¹⁾と述べた。「元来、〈阿頼耶識〉そのものは、空・無我の存在であるにもかかわらず、実体的な自我として、頼りにされる傾向をもっていることでありましょう。〈阿頼耶識〉は、不動の自己と思ひ込むのもっとも都合のよい性質を持っているのです。古い自己の残痕を貯えているから、昔の自己と現在の自己とが一体のものだと思われるのです」²²⁾。亡霊はいつまでも過去の自己と今の自己が連続したものと思ひ込んでいる。

「西行法師は亡霊が仏縁につながるような御心になられることをおすすめ申し上げた。死んでしまえば王侯も庶民もおなじであるのにと歌を声高にうたいあげたのである」²³⁾。西行法師は亡霊にそのような気持ちで歌を詠み、語ったと思う。西行と亡霊との物語は次の物語「菊花

の約」では義兄弟の契りを結んだ二人の武士（一人は亡霊となって再会を果たす）に繋がっていく。西田汐里氏は『雨月物語』を表、図を駆使して、時間と場所、登場人物の関係性、怪異現象の内容を調べて「高田氏の「連環」研究に、各篇を他の観点から考察し分類した項目を合わせて考えることにより、物語同士の関連の強さを加えて考察することができるという結果となった」²⁴⁾と論じている。

サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』の最終の物語、つまり九つ目の「テディ」の中で、テディは船上で知り合ったニコルソンと会話する場面がある。「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」テディは突然口に出した。「此道や行く人なしに秋のくれ」「何だって。もう一度言って。」にっこりしながらニコルソンは聞こうとした。「今言った二つは日本の詩だよ。二つの詩は感情に訴える言葉遣いをあまりしてないでしょう（下線田中）」²⁵⁾とテディは言った。テディは日本の詩があまり感情的ではないと語っている。上の二つの芭蕉の句に影響を与えている仏教について鈴木大拙氏は次のように述べている。「仏陀がその最初の説法で、「悔い改めよ。天の国は近づいた」とは言わずに、四聖諦の確立を説いたというのは当然である。前者は感情に呼びかけるものであるのに対し、後者は知性に訴えているのである。涅槃の教えがキリスト教の愛の福音よりも知性的であることに疑問の余地はない。それはまず、日々の経験がはっきり示しているように、人生が悲惨なものであるということを認識する。次に、その原因が、存在することの真の意味に関する我々の主観的無知および、我々の精神的洞察力を曇らせることで我々を虚妄なものに執拗に執着させる自己中心的欲望にあることを確認する。そして、最後に、一切の悪の根源であるエゴイズムの完全なる断滅を主張する。これによって、主観的には心の平安が回復し、客観的には普遍的な愛の実現が可能となる。このように仏教は涅槃および普遍的愛の教義を発展させるにあたって、きわめて論理的にことを進めているのである」²⁶⁾。鈴木氏の述べているように、仏教は知的な教えであるのでそれに伴って芭蕉もまたそのような態度で俳句を詠ったものと思われる。だからテディはそこを敏感に嗅ぎ取って上のように発言したと思う。

高橋美穂子氏によると、「「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」は R. H. Blyth の『禅と英文学』（北星堂、1942）の265頁に、また「此道や行く人なしに秋のくれ」の句は、同じく Blyth の *Haiku* vol. 1（1949; Hokuseido, 1981）の169頁と vol. 3（1952; 1982）の901頁に“Teddy”に引用されたのと同じ形の英訳がみられる」²⁷⁾。「ブライスは京城着任3年目の1927年に、（鈴木）大拙の *Essays in Zen Buddhism, First Series* 『禅仏教に関する緒論』第一集を読んで感動し、以後（鈴木）大拙の禅思想の信奉者となる。したがって当時相次いで刊行された（鈴木）大拙の禅書を読破したのではないだろうか」²⁸⁾と吉村侑久代氏は述べている。吉村氏は更に次のように述べる。

ブライスと（鈴木）大拙の初会見は、いつ金沢のどこでなされたのであろうか。ブライスは1940年11月に、第四高等学校の英語教師に採用されていて、彼の『禅と英文学』は翌年1941年5月に脱稿している。そして太平洋戦争が同年の12月8日に勃発している。このことから、筆者（吉村侑久代氏）はブライスと大拙の初見は、ブライスが就職した1940年11月から、戦争がはじまり交戦国民間人として広坂署に拘束された1941年12月8日までの間に行われたと推測していた。さらに詳細な事実が、北国毎日新聞の記事で判明した。その記事によると、大拙は1941年10月12日から19日まで、金沢の天徳院に滞在している。15日には第四高等学校の学生のために「禅と日本文化」の講演会を行っている。大拙の投宿した天徳院は、ブライスの居住する鷹庇町と同じ地区にあった。ブライスはこの10月12日から19日の一週間の間に天徳院の大拙を訪ねたのではないだろうか。この会見は、ブライスが広坂署に連行される約二か月前のことであった²⁹⁾。

吉村氏は詳細に調べてブライスと鈴木大拙の初めての直接の出会いを推測している。この貴重な出会いは両者の関係を更に緊密のものにしていったと思われる。それはサリンジャーにとって間接的ではあっても影響を与えていると考えられる。「サリンジャーは鈴木大拙やアラン・ワッツやブライスなどの著書をとおして、その理解を深めたようである」³⁰⁾。ブライスの授業を大学で受講した向井俊二氏は先ほど上でテディが語った芭蕉の俳句「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」とは異なる「閑けさや岩にしみいる蟬の声」を取り上げて「静けさは、蟬の声があってこそ生じる、いや、蟬の声が静けさそのものなのだ」³¹⁾と論じている。芭蕉の俳句観に対する鋭い指摘ではないだろうか。芭蕉が沈黙、すなわち静寂、落ち着きを大切にしていることは言い換えれば生きる力を削いでしまう徒な感情的になったりすること、また感傷に耽ることのないように心したといえる。芭蕉は即今を生き切った人であったことになる。サリンジャーはブライスの作品とともに鈴木大拙の著書も読みながらそのようなことを覚えたのではないだろうか。テディが語った芭蕉の句の一つ「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」の季節は夏である。そしてもう一つの句「此道や行く人なしに秋のくれ」の季節は秋である。そこに刻々と時は移ることも暗示している。そしてそれは最初の物語「バナナフィッシュにうってつけの日」の海水浴の場面へと移っていく。つまり夏である。その一連の流れに循環性が見られる。

テディは言った。「まっさきに子供たちみんなに集ってもらい、坐禅の仕方を示したいと思う。そして自分は誰なのかを見出す仕方を示したい。自分たちの名前が何であるとか、事物は何であるとかではなくて」³²⁾。石田稔一氏は「人間を含めて世界のあらゆる事物には実体がない訳ですが、それでは、この世の中に実体というものは、全く存在しないのでしょうか。実

は、あるのです。それは言語（あるいは厳密に言えば、その概念）です。例えば鉛筆とか電気スタンドという言葉（もしくはその概念）は、それらを頭に浮かべる個人の生き死にに関係なく、自立のかつ恒常不変に存在しますし、物質的存在ではないから単一です³³⁾。テディの言っている、「自分たちの名前が何であるとか、事物は何であるとかではなくて」というのは言葉の実体化にとっぷり浸かってしまい、自分を見失ってしまう危険性を述べている。だから自分は誰なのかと問うている。そのためには最初に坐禅をすることによって落ち着いていくことから始めようと述べている。

石田氏は「たしかに私達は、一面において、事物・人物を昨日までの事物・人物と同じものとして対応しなくては生活が成り立ちません。しかしながら、他面、私達は事物・人物が恒常不変のものでないことを腹に置いていなくてはなりません。事物・人物を一応不変なものとして対応しつつ、同時に、それがいつどのように変わっても不思議ではないという心構えも備えていること—これが実体視から生じる現実誤認を避ける基本的なあり方と思われる」と説明している³⁴⁾。

石田氏は更に次のように説いている。

色不異空及び色即是空は、駐車場に車が無く、花びんに花が無く、演算の桁目に数字の無い状態に相当するものです。これは事物を本質的には無いと見ることにより、事物への執着を戒めようとするのです。だからこれは言い方こそ違い、釈尊の我執の戒めや、人の無我や、諸法無我などと同じ考えを述べていると言えます。所でこれは、誤解されると虚無主義を生み出す危険があります。事物が無駄となると、自分が生きているのも無意味であり、真理や道徳などどうでもよいと考え、勝手気ままな生活に走る危険があります。そこで（般若）心経は空不異色とか空即是色と言うのです。これは（般若）心経がはじめて言い出したことですが、駐車場に車が有り、花びんに花が有り、桁目に数字が有る状態に相当するものです。これは、虚無主義に走る誤解を否定すると同時に、因縁仮和合によって、今ここにこうしてある、それぞれの事物の、そのかけがえのない価値に気づき、その尊さ、有難さを噛みしめて生きよと説くのです。（般若）心経は私達が事物を有るを見て執着する点を「色→空」によって否定し、また事物を無いと見て虚無主義になる点を否定して、「空→色」と説き、両極端を戒めています。つまり事物は有るのでもなく無いのでもない—非有非無—と見るバランスのとれた見方をする必要があると説いているのです。そしてその非有非無の見方が、ほかならぬ空の見方なのです³⁵⁾。

テディの言葉を補うために石田稔一氏の著書から引用した。またテディが船上で知り合ったニ

コルソンは輪廻の言葉を発している。サリンジャーは鈴木大拙氏の著書も読み、仏教への理解を深めている。鈴木氏は輪廻について次のように述べている。

大乘の涅槃というのは生の根絶ではなく生に覚醒すること、つまり人間としての熱情や欲求を破棄するのではなく、それを浄化し高めていくことなのである。この永遠なる輪廻の世界は、邪悪なるものが跋扈する場として忌避されるべきところではなく、普遍的な幸福を目指して、我々が持つすべての精神的可能性と力とを展開することができるよう、我々に常に機会を与え続けてくれる場として見なされるべきものである。我々は人生の義務と重責を前にして、居心地のよい殻の中に閉じこもっているカタツムリのように縮こまってしまう必要はない。それどころか菩薩は生死の連鎖の中に涅槃を見出し、悪の問題に果敢に挑戦し、そして主観的無知から菩提を浄化することによってそれを解決していく³⁶⁾。

鈴木氏は輪廻の世界を嫌うところではなくて、私たちの幸福の機会を与えてくれる場として捉えていく。そして生死の循環の中において仏性を開発して真理を得知していく。しかし仏は衆生の救済を自らの課題として迷いの世界にとどまり、活動し続けるのであるから、真理を得知していく境地にとどまることはできないという。道元禅師は「煩惱のもとは無明にあるが、誰がこの無明を厭い嫌うことができよう。それはただ秋の露のように跡かたなく消えゆくものである。真実はもともとこの無明の中にこそあるのである」³⁷⁾と述べている。

「テディ」の作品の最後の場面には「非常に鋭く、響く悲鳴が聞こえた——疑いようもなく少女から生じたものである。」³⁸⁾という表現がある。この悲鳴によって死が連想される。そして『ナイン・ストーリーズ』の最初の物語に繋がっていく。何故ならば、最初の物語「バナナフィッシュにうってつけの日」で青年が自分のこめかみを銃で撃つ場面に繋がっていくからである。

野依昭子氏は『ナイン・ストーリーズ』を今まで論じられていなかった見解、すなわち一つのまとまった独立した作品として捉え、聖書、神話、童話、先人の作品を取りあげ、詳細に論じて大部の論文を仕上げている。野依昭子氏は「それらが読者に潜在する記憶、想像力、共感力を喚起して連想を生じさせる目的もある」と巻頭で書いている³⁹⁾。終盤のところで野依氏は次のように述べている。

死は終りではなく生の始まりでもあると言う意味で、テディが「死ぬ時は、ただ身体から離脱するだけなんだ。なんてこった。みんな何千回もしていることなのに。思い出さないからって、しなかったことではないんだから。馬鹿馬鹿しいったらありゃしない」と言う

ように、悲劇的なものではないかもしれない。たしかに「バナナフィッシュにうってつけの日」と「テディ」との間に七編の物語があり、そのほとんどは通常の意味で、生きることを肯定するようなハッピー・エンディングの物語になっている。サリンジャーは『九つの物語』の初めと終わりにそれぞれの主人公の死を書くことによって、生は死の中にあり、また死は生の中にあるという構成でまとめようとしたのではないだろうか⁴⁰⁾。

そして野依氏はさらに踏み込んで「もう一つの選択肢として、循環の帰結を選んだのかもしれない」⁴¹⁾と述べている。野依氏の循環の帰結かもしれないという考えに従えば『ナイン・ストーリーズ』も『雨月物語』と同様の循環構造と言えるだろう。ただ『雨月物語』と違って、この小説『ナイン・ストーリーズ』の巻頭には禅の公案「私たちは両手をたたき音を知っている。しかし片手をたたき音は何か」⁴²⁾が掲げられている。安藤正瑛氏は「公案とは本心打発のために肝要な条件というべき意識の統一を純熟させるささえ・助杖のごとき役目を果たすものである」⁴²⁾と述べている。

この公案は白隠慧鶴禅師（1685-1768）が編み出したことはよく知られている。白隠禅師は次のように述べている。

この隻手の音は、耳で聞くことができるようなものではない。思量分別をまじえず五感を離れ、四六時中、何をしている時も、ただひたすらにこの隻手の音を拈提して行くなれば、理屈や言葉では説明のつかぬ、何とも致しようのない究まったところに至り、そこで忽然として生死の迷いの根源、根本無明の本源が破れる⁴³⁾。

白隠禅師は重要なことを述べている。種々の条件や要素によって成り立っている存在には固定的、実体的なものはないけれど、執着し実体化してしまう。そういう中で現実の自己を自覚して自己を転じていく。白隠禅師はその時、^{あんじん}安心を得る公案として隻手の音を創出された。「江戸時代になって白隠慧鶴（禅師）が現われ、それまで行われていた公案を体系化し、いっそう参禅を重視する姿勢を打ち出しました。白隠の禅は、その後の臨済禅の流れを決定づけ、現在の臨済禅はすべてその影響を受けています」⁴⁴⁾という。

サリンジャーがこのような重要な公案を題辞にもってきたことはアメリカ文学では画期的な試みである。西洋の作者が題辞（エピグラフ）に持ってくるのは西洋の有名な文人、哲学者、宗教者、聖書などを引用することが多い。それにも拘わらずサリンジャーはあえて禅の公案を掲げた。だから『ナイン・ストーリーズ』には公案的なもの、言い換えれば心の問題提起が見られるのではないだろうか。例えば、最後の物語「テディ」ではテディは俳句にはほとんど感

情的な要素がないけれど、彼の父親は新聞を読むと感情的になると批判している。これも公案的なもの、すなわち問題提起ではないだろうか。この物語では船上での幼い女の子の叫び声で終わっている。船上は海へと連想される。その幼い女の子の叫び声は最初の物語「バナナフィッシュにうってつけの日」で海水浴を楽しんでいる小さな女の子が喜びの叫び声を上げるところに繋がっていく。この物語は青年が拳銃の狙いを定め、自分の右のこめかみを撃ち抜いている。この自殺の場面もまた公案的、心の問題提起と思われる。

辻村英夫氏は「サリンジャーと漱石における自殺」と題する論文を書いている⁴⁵⁾。この論文はサリンジャーの「バナナフィッシュにうってつけの日」におけるシーモアの自殺と、夏目漱石の『こころ』の「先生」の自殺について論じている。自殺についての貴重な論考である。誰だって自殺はしたくないし、されたくない。自殺防止のために尽力されている様々な分野の方々を思う。しかしサリンジャーは何故自殺の物語を書いたのであろうか。夏目漱石は何故『こころ』で自殺を書いたのであろうか。真似をされたくないと思う人はこれらの作品を快く思わないであろう。だからと言って禁書にすることはかえって良くないであろう。むしろこれらの作品に対峙することによって自分自身が学び、強くなっていくのではないか。そうあってほしい。自殺は避けたい。しかし自殺者を嘲笑するだけでいいのだろうか。

1963年6月ベトナムの仏教僧、ティック・クアン・デュック師ら7名の僧侶が植民地政策を推し進めるフランスとそれを後押しするアメリカを背後にした南ベトナム政府、ゴ・ジン・ジェム政権の仏教への抑圧に抗議して、焼身自殺をしている。アメリカ合衆国首都ワシントンD.C.のベトナム戦争戦没者慰霊碑（1982年建立）前で数名の帰還兵が自殺をしている⁴⁶⁾。

佐々木閑氏は自死・自殺について次のように述べている。

人が全て平等であるならば、死んでいる人は、自分の思いや意見を人に伝えられないというハンディキャップを背負っているのだと理解した上で「私たちのそばに今、座っておられる」と考えるべきなのです。それが、釈尊の説く「平等」であると考えます。社会では、自殺に対するイメージが間違った形で広がりをもっており、とても残念に思います。前述の「自殺は犯罪である」という考え方に加えて、自殺した人は「弱い人だった」「愚かな人だった」というような見方、考え方が今なお存在し続けています。こうした考え方が生まれるのは、生きている私たちが正常であって、亡くなった方は正常な世界から外れた人間であるという意識があるからではないでしょうか。仏教の『サマンタパーサーディーカー』という律の注釈書は、この物語の中では相手を殺したり、お互いに殺しあったりすることだけが罪であって、自ら命を絶つこと、自分を殺してほしいと頼むことは罪に問われないと明記しているのです。仏教には「創造主」がいません。私たちは偶然、輪廻の世

界に生まれた生物であり、全てが苦しみであるという世界で悩みながら生きる運命を背負っています。これは、生まれながらに、誰かから生きる意味を授かったわけではないということです。同時に、生きる意味を自分自身で見つけるしかないということでもあります。ですから、自分の人生が誰かにつくられたものでない以上、私たちは生きることに負い目を感じる必要はありません。生きる権利はありますが、生きる義務を負わされているわけではないのです。世俗的な意味から、自殺は、すでに苦しみを受けている人が、その苦しみを消すために行う行為です。新たな悪を生む行為ではありませんから、自殺は悪にはなり得ないのです。また、涅槃への道の邪魔になるかといえば、それも違います。ただし、もったいない行為だとは言えるかもしれません。せっかく人として生まれて、悟りを開く道を歩む機会があるのに、自ら命を絶ち、これを逃すのは惜しい行為と考えられます。しかし、悪いことだとは言えません。このように、世俗的、仏教的な面から見ても、自殺は悪に入らないのです⁴⁷⁾。

佐々木閑氏の説明は理路整然としている。とても分かりやすいので長文を引用させていただいた。平井正修師も「禅ではどんな死に方も美化しないし、^{おとし}貶めもしません。どう死んだっていい、とするのが禅（仏教）の風光です」⁴⁸⁾と語っている。また吉田道興氏は「自死者が増加し、脳死と臓器移植等の問題が種々論議されている今日、「生」と「死」を共にかけがえのない「仏の御いのち」と受け止めること（生也全機現・死也全機現）の大切さが強く問い直されていると言えよう」⁴⁹⁾と述べている。まことにそうだと思う。佐々木閑氏、平井正修師、吉田道興氏の説明を読むとサリンジャーの作品「テディ」のテディの死、「バナナフィッシュにうってつけの日」のシーモアの死、夏目漱石の作品『こころ』の先生の死、およびKの死も一歩理解に近づく。死者に対して悼む気持ちを抱き、私たちは今の命を精一杯生きて行くことが死者への供養になっていく。辻榮子氏は「ニューメキシコ州のタオス・プエブロ・インディアンは、宇宙の流れのなかで、自分の位置を知っていて、死を少しも恐れずに堂々とした人生を送り、祝祭のような死を迎える。その日を A Perfect Day for Death（今日は死ぬのにもってこいの日）として待ち受ける人生観をもっている」と述べている⁵⁰⁾。そう考えればこれらの作品は死というものに対して重要なメッセージを伝えようとしているのではないか。特に『ナイン・ストーリーズ』は白隠禅師の公案が提示されている。これを無視することはできない。それが作者、サリンジャーの強い思いであろう。金山秋男氏は「サリンジャーが聞いて欲しいのは、外側には響くことのない魂のふれ合いの音なのである」⁵¹⁾と述べている。その通りである。

最後の物語「テディ」の少女の悲鳴は最初の物語「バナナフィッシュにうってつけの日」の少女が海水浴で喜びの悲鳴を上げるに繋がっていく。その少女はコネティカット州に住んでい

るという。コネティカット州は次の物語「コネティカットのひよこひよこおじさん」に繋がっていく。そこの物語で、4人の男がエスキモーの氷の家にこもって餓死することが挙げられる。これは次の物語「対エスキモー戦争の前夜」に繋がっていく。ここではひよこが死んだことを少女は思い出している。これは次の物語「笑い男」で犬、ネズミ、鷲、狼、蛇などと仲良しになった笑い男に繋がっていく。ここでは笑い男が小さい時に誘拐されたが、それは次の物語「小舟のほとりで」に登場する少年が家出を試みることに繋がっていく。テーブルの下にもぐりこもうとする少年は次の物語「エズミに捧ぐ—愛と汚辱のうちに—」のやはりテーブルの下にもぐる少年に繋がっていく。この緑色をした少年の目は次の物語「愛らしき口もと目は緑」に繋がっていく。ここで語られるニューヨークは次の物語「ド・ドーミエ＝スミスの青の時代」でニューヨークに帰ってきた19歳の男性と繋がっていく。ここでアメリカに渡る船のことが語られる。このことは船上での最後の物語「テディ」に繋がっていく。そして少女の悲鳴は最初の物語「バナナフィッシュにうってつけの日」の海水浴で喜びの悲鳴を上げる少女に繋がっていく。このように『ナイン・ストーリーズ』もそれぞれ独立した物語でありながら、循環していると考えられる。また『雨月物語』の「貧福論」も『ナイン・ストーリーズ』の「テディ」も未来を語っているところは共通している。『雨月物語』も九つの物語が独立それぞれ独立していながら、全体としてつながり、統一体を形成していることを専門家の高田衛氏、西田汐里氏、板坂則子氏から学んだ。時代も国も違うのに偶然にも『雨月物語』も『ナイン・ストーリーズ』も九つの物語から構成され、全く同じとは言わないが、全体が統一され、循環している構造をなしている。作家の思想は時代、国境を越えていくのであろうか。

サリンジャーの作品を通して「公案」は西洋に親しまれていった⁵²⁾。アメリカの詩人、ゲイリー・スナイダー（1930-）も例外ではなかった。スナイダーは公案を学ぶために京都の禅寺で修行した。彼は次のような詩を書いている。

ルーのために／から

ある日あつという間であつたがルー・ウェルチが現われた、
私と同じように彼も生きているかのように。

「どうした、ルー」と私は声をかけた、
「君は最後に銃で自殺をしたのではなかったかい。」

「そう、自殺したんだ」とルーは答えた、
しかしその時は背中がぞくぞくするのを覚えた。
「君は残念ながら自殺をしたんだ」と私は言った—

「そのことを今、体で感じるよ。」
「そうかい」と彼はしゃべった。
「君の世界と僕の世界の間には
ありふれた恐怖がある。そのわけは知らないけれど。
僕が言いに来たことは、
子供たちに循環のことを教えてほしいことだ。
生命の循環、その他あらゆる循環。
これが最大の問題なんだけれど、
全く忘れられているんだ。」⁵³⁾

この詩でルーは循環の大切さを子供たちに伝えてほしいためにこの世に現れて、スナイダーに懇願している。平井正修師は「仏教の言葉に「成住壊空じょうじゅうくうくうというものがあります。人が生まれて、生きて、死んで、土に還って、というのもピタリこの“法則”に則っています。大なり小なり、その繰り返しです。かたちあるものだけではありません。かたちがないもの、目には見えないもの、触れることができないものも、同じです。たとえば、さまざまな思い、心の迷い、悩み、苦しみ、憎しみ……といったものも生じて、消えていきます」⁵⁴⁾と語っている。この詩を作ったスナイダーもまた、平井師の述べる「成住壊空」やサリンジャーの思う循環の重要性を引き継いでいる。現在プラスチックごみ問題は世界的に深刻である。プラスチックも循環していく。「東京から五百八十キロも南にある鳥島に住むアホウドリのおなかにカップラーメンの器の破片やビニール袋のきれはしなどがたまっていくという。くちばしから釣りのテグスをたらした若鳥もいたという」⁵⁵⁾。今日このプラスチックの問題に世界中の人々が取り組んでいる。『ナショナル ジオグラフィック日本版』(2019年5月号)によると「英国のプリマス海洋研究所とプリマス大学の研究者たちが2017年に調査のために採取した仔魚のうち、3%が微小なプラスチック製の繊維を食べていた。米国海洋大気庁(NOAA)に勤務する海洋学者のジャミソン・ゴープと魚類生物学者のジョナサン・ホイットニーが胃の中からプラスチックを見つけた仔魚のうち、最小のものは体長が6ミリほどしかなかった。つまり、魚たちが食べるプラスチック繊維はさらに小さいというわけだ。「肉眼で見えるか見えないかの大きさです。1ミリもないですから」と、ホイットニーは話す。「それこそが恐ろしいのです。目に見えないような小さなかけら(欠片)が問題を引き起こしているのですから」たとえば、プラスチックを摂取した魚では、食欲低下や発育不全が見られるというのだ。こうした事態は、魚の繁殖に影響を及ぼし、最後には個体数の減少を招くおそれがある」⁵⁶⁾。循環を忘れてはいけないことをこの『ナショナルジオグラフィック』の「小さなプラスチック、大き

な問題」(文＝ローラ・パーカー、写真＝デビッド・リトシュワガー)の記事は語っている。上田秋成の『雨月物語』の循環、サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』の循環、スナイダーの詩「ルーのために／から」の循環、『朝日新聞』「天声人語」のプラスチックの循環問題提起、『ナショナルジオグラフィック』のプラスチック循環問題の記事は全部繋がっている。

注

- 1) 高橋美穂子『J. D. サリンジャー論『ナイン・ストーリーズ』をめぐって』(桐原書店、1995)、251頁。
- 2) ヒレル・レビン『千畝 一万人の命を救った外交官 杉原千畝の謎』監修・訳者 諏訪澄／篠輝久(清水書院、1998)、III 頁。
- 3) J. D. Salinger, *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour: An Introduction* (Little, Brown and Company, 1991), p. 98. 拙訳。
- 4) ジョアンナ・ラコフ『サリンジャーと過ごした日々』井上里訳(柏書房、2015)、365-66頁抜粋引用。
- 5) *Introduction*, 前掲、p. 99. 拙訳。
- 6) 村田昇「近世文芸の仏教的研究」『秋成研究資料集成 第11巻小説論文集』近衛典子監修(クレス出版、2003)、500頁。
- 7) 鷺山樹心『上田秋成の文芸的境界』(和泉書院、1988)、64頁。因みに西福寺様を拝登した時、西福寺の名誉住職、高木正隆上人(第廿世)は「鷺山樹心氏はこの西福寺でしばしばゼミの学生たちや一般の方々に上田秋成についての講義をしていました。また永観堂においても上田秋成展を開き、上田秋成を顕彰することに尽力された先生でした」と語りました。お寺のノートに記帳された方々のお名前を拝見して、厳かで不思議な靈気を覚えた。(令和元年8月24日)
- 8) 岡本かの子『岡本かの子全集2』(筑摩書房、1994)、253-54頁抜粋引用。因みに「(上田)秋成の住む庵の隣家に母を失った幼児がいた。秋成は膝の上にその子を乗せて可愛がっていた。しかし寛政5年4月、幼児は病におかされる。秋成は必死で救おうと投薬を試みるが効果なく死んでしまう。妻湖璉尼が「花見れば秋の霜にもあふものをこのなでしこよ盛りまたずて」(美しい花を咲かせれば、秋の霜で枯れてしまうのも仕方がないが、この撫子は花の盛りをまたずに枯れてしまったよ)」と詠むと、秋成は耳を塞いだという(飯倉洋一『上田秋成一絆としての文芸』大阪大学出版会、2012、35-6頁)
- 9) 板垣則子「解説」『わたしの古典 19大庭みな子の雨月物語』(集英社、1987)、248頁。
- 10) 三村竹清他「秋成論講 諸道聴耳世間猿」『秋成研究資料集成 第11巻 小説論文集』近衛典子監修(クレス出版、2003)、397頁。
- 11) スーザン・B・ハンレー『江戸時代の遺産一庶民の生活文化』指昭博訳(中央公論社、1990)、111-113頁。
- 12) 同上、197-198頁。
- 13) 小倉玄照『修証義のことば』(誠信書房、2003)、106-107頁。因みに芹川博通氏は「有情にも無情にも、ともに仏性が存在するという仏教の自然観は、仏教が人間中心的見解をとらず、両者を同等に考える見方に基づいていることを物語っています」と述べている。('「ともにいきる」思想から「いかされている」思想へ—宗教断想三十話— [改訂版] 北樹出版、2013、84頁)
- 14) 改訂『雨月物語』現代語訳付き上田秋成著、鷗月 洋 訳注(角川書店、2018)、173-74頁。

- 15) 同上、182頁。
- 16) 『和文仏教聖典』(仏教伝道協会、2013)、129-30頁。
- 17) 鶴月洋訳注、前掲、182-83頁。
- 18) 『新編日本古典文学全集78』中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳(小学館、1995)、606頁。
- 19) 鶴月洋訳注、前掲、19頁。
- 20) 太田久紀、『仏教の深層心理 迷いより悟りへ・唯識への招待』(有斐閣、1983)、132頁。
- 21) 鶴月洋訳注、前掲、23頁。
- 22) 太田久紀、前掲、133-35頁。
- 23) 鶴月洋訳注、前掲、28-9頁。
- 24) 西田汐里『『雨月物語』の「連環」構想を中心として』『上越教育大学国語研究』No. 28 (2014: 13-26)、17頁。
- 25) J. D. Salinger, *Nine Stories*, (Little, Brown and Company, 2001), pp. 282-83. 拙訳。田中啓介氏によると「サリンジャー文学における東洋思想の深化は、『ナイン・ストーリーズ』以降の短編や、のちの中篇の出現を待たなければならない」(『『ライ麦畑のキャッチャー』の世界』開文社、1998、184頁)という。そういう点からすると、この『ナイン・ストーリーズ』も注視すべき作品といえる。
- 26) 鈴木大拙『大乘仏教概論』佐々木閑訳(岩波書店、2016)、75頁。
- 27) 高橋美穂子、前掲、208-09頁。
- 28) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. プライス (Reginald Horace Blyth) 研究—足跡と業績—』(林檎屋文庫、2017)、49頁。
- 29) 同上、70頁。
- 30) 安藤正瑛『アメリカ文学と禅—サリンジャーの世界』(英宝社、1970)、53頁。
- 31) 向井俊二「J. D. サリンジャーと禅」『戦後の思想と社会 神奈川大学創立35周年記念論文集』(神奈川大学、1963)、102頁。因みに寺田守氏は次のように書いている。「芭蕉は理論や説明の無力を、理屈や夫自身が未熟のしるしである事を、充分知ってゐた。だが理論や説明は無価値ではない、理論は理論として、説明は説明として夫々有力な役割を持ってゐるものである。然し理論や説明は最後のものではない。最後のものこそ畢竟実践である。芭蕉は沈黙の意味と沈黙の機会とを弁えてゐたのである。」(寺田守『芭蕉の「人間」と藝術』(黄蜂社、1978)、24頁。寺田守氏は昭和25年(1950)年11月28日没す。行年38歳。この論文は東京大学の学生時代に書かれた一部という。)また吉岡由佳氏は「野口米次郎は俳句を“silence”を表す最も適切な形式であるとみなしていた」と論じている。更に野口米次郎の自然と自己の体験が一体となった“sounding silence”を紹介している。(吉岡由佳 博士論文『Voice and Silence in Asian American Poetry』(2011、原文は英文) p. 44. および p. 45. この見解も向井俊二氏の考えと共通するものがある。
- 32) *Nine Stories*, 前掲、p. 298. 拙訳。
- 33) 石田稔一『般若心経読解』(近代文藝社、1996)、79-80頁。
- 34) 同上、82頁。
- 35) 同上、89-90頁。
- 36) 鈴木大拙、前掲、377-378頁。
- 37) 『永平広録 4・永平語録 原文対照現代語訳・道元禅師全集⑬』鏡島元隆訳註(春秋社、2012)、32頁。
- 38) *Nine Stories*, 前掲、p. 302. 拙訳。
- 39) 野依昭子「J. D. サリンジャーの『九つの物語』の統一性について」『神戸薬科大学研究論集: *Libra*』10

巻、(2010: 1-36)、1頁。

40) 同上、31頁。

41) 同上、32頁。

42) 安藤正瑛、前掲、40頁。

43) 白隠慧鶴禅師『白隠禅師法語全集 第十二冊』(禅文化研究所、2001)、9頁。三浦清宏氏は公案について興味深いことを述べている。彼はまずある武士の息子のことを紹介している。その息子は父親とともに戦ったが父親を見失ってしまった。しかし父親はどこかに生きていると思い、その若者は父親を捜すため遍歴の旅に出る。月日が経ったある日、禅僧と出会った。その僧侶は若者の話を聞くと、「父親はあなたと共にいるではないか。どうして父親を探し求めるのか」と論じたという。それを聞いた若者ははっと我に帰り、その僧侶の弟子になり、禅の修行に打ち込んだという。この話について三浦清宏氏は次のように語る。「禅僧の言葉も立派である。彼はただちに、少年の思いの本質を見抜いた。これは単に彼の失われた父親の問題ではない、彼が見失った父親に投影されている、父親像の問題だと察した。いや、このように現代風に分析するのは、問題をゆがめるおそれがある。禅僧の洞察は、もっと直覚的であり、全人格を含むものだったと思う。これはこう言ってもいいのだ。「まわりを見回しなさい。おまえの会う人間は、みんなおまえの父親ではないか」青年は、自分の思いの本質に眼を開かれたのだ。これは(そうは書いてなかったが)一つの悟りの物語である。青年は、父親とは何か、という問題を通じて、悟りを開いたのだ。「無」とは何か、「隻手の声」とは何か、というのと同じことである。禅では、一つの公案が与えられると、その公案に全身全霊を賭けて迫ってゆく。この青年にとって、彼の真剣さが、「父親」を一大公案たらしめたと言えるだろう。」(『幽霊にさわれて 禅・心霊・文学』南雲堂、1997、20-24頁)

44) 中尾良信・瀧瀬尚純『日本人のこころの言葉 栄西』(創元社、2017)、58頁。

45) 辻村英夫「サリンジャーと漱石における自殺」『大阪電気通信大学研究論集(人文・社会科学編)』第28号、(1993: 101-113) 参照。

46) 田中泰賢「アメリカからのメッセージ—ロアルド・ホフマンとフィリップ・ホエーランの詩—」『愛知学院大学教養部紀要』第66巻第2・3合併号(2019: 97-112) 参照。

47) 佐々木閑 講演「自死・自殺を仏教の視点から考える」

(<https://shimbun.kosei-shuppan.co.jp/kouenroku/12782/3/> 2019年アクセス。)

佐々木閑氏は「現代は人権のことをうるさく言いながら、最も根源的な「死者の人権」を無視する冷たい時代です。生者の先達として死者を尊ぶ気持ちが必要です」と書いておられる。(筆者宛ての書簡、2019年10月4日付け) 誠に学ぶべき言葉です。宇江敏勝氏の『流れ施餓鬼』(新宿書房、2016)は山水への畏敬、そしてそこで生死を繰り返していくあらゆる生き物(動物、植物、微生物、細菌)への深い思いが描かれている。「流れ施餓鬼」という行事は亡くなっていった人々への荘厳な供養である。送るものもまた送られるという循環の様子が伺われる。竹内史博編著『仏教と生活2 施餓鬼』(青山社、2013)によると「大正12年(1923)9月1日、関東一円を襲った関東大震災から間もない彼岸の入り(21日)は、被災により亡くなった人の三七日に当たり、この日、大施餓鬼会が催された」という。(92頁)

48) 平井正修『花のように、生きる 美しく咲き、香り、実るための禅の教え』(幻冬社、2014)、205頁。

49) 吉田道興『道元禅師の伝記と思想研究の軌跡』(あるむ、2018)、346-47頁。

50) 辻榮子「J. D. サリンジャーの *A Perfect Day* に想う」『英米文学手帖』関西英米文学研究会、(2010: 60-62)、61頁。

51) 金山秋男「声なき声を聴く—J. D. サリンジャー:『ナイン・ストーリーズ』」『明治大学教養論集』通巻

227号 外国語・外国文学 (1990: 1-12)、6 頁。

52) Bob Steuding, *Gary Snyder*, (Twayne Publishers, 1976), p. 52.

53) Gary Snyder, *Axe Handles*, (North Point Press, 1983), p. 7. 拙訳。

54) 平井正修、前掲、202 頁。

55) 「天声人語」『朝日新聞』(1989年3月19日)。

56) 『ナショナル ジオグラフィック 日本版』(2019年5月号)、78-91頁抜粋引用。

この論考は比較思想学会東海地区研究会(2019年7月13日、於愛知学院大学楠本学舎薬学部会議室)での口頭発表を加筆修正したものです。

Working with Silence in the Second Language Classroom

Heather DOIRON

Abstract

One of the challenges experienced by many EFL teachers in Japan stems from the lack of student-initiated output. Among the research conducted by James King, silence in the Japanese EFL classroom may be influenced by psychological, sociological, and educational factors (2011). As Japan continues to strive to improve English education, often, there is little attention paid to the lack of English that is necessary for day to day activity in Japan. In hopes of increasing English proficiency in Japan, attention should be given to the *scaffolding* of lessons, in order to provide students an opportunity to *notice* and internalize language learning.

In November of 2018, Japan ranked 49th out of 88 countries in the English Proficiency Index¹ (Fujiwara, 2018). This fact baffles many EFL instructors in Japan, especially in light of the country's continued efforts to reform and improve EFL instruction (Torikai, 2018). To help better understand EFL acquisition in Japan, *Silence in the Second Language Classroom* by James King provides insight into Japan's EFL dilemma and concludes that "EFL instruction in Japan needs to place a premium on [student] oral participation" (p. 3).

This paper is organized as follows: First, I will briefly comment on psychological, sociological, and educational points included in King's research. Then I will comment on the issues of *noticing* and *scaffolding* and why both are important in the Japanese EFL classroom.

Psychological, Sociological, and Educational factors

King draws on research based on 48 hours of observations involving 900 students from 30 different Japanese university classes. Among the topics covered, King suggests several psychological, sociological, and educational factors that potentially explain the meaning of silence in the Japanese EFL classroom.

Psychological

King cites a study by Vogel, based on the differences between Western and Japanese new-mother behavior in regards to mother-child communication. Whereas the Western mother begins talking to the newborn immediately, the Japanese mother-child relationship involves much less verbal communication. Early on, Japanese mothers try to sense under what specific circumstances their newborn babies cry and then try to minimize the crying to just a few seconds (Vogel, 1963). Japanese psychoanalyst, Takeo Doi, used the Japanese term *amae* which he defined as “to depend or presume upon another’s benevolence” (1986, p. 121). King expands on *amae* by drawing on the work of Erhman and Dornyei (1998), which suggests that often strong mother-child relationships transfer to dependency on teachers and other figures of authority. While King is hesitant to make a strong connection between *amae* and silence in the Japanese EFL classroom, the author contends that “many [Japanese] learners are socialized into a state of hypersensitivity to those around them from a very early age, and this excessive awareness of others does indeed lead to verbal reticence in public situations” (p. 48).

Sociological

Referring to sociological factors, King expands on topics such as the lasting effects of Confucianism on Japanese culture. The author explains in detail how pressures to conform in Japanese society may evolve as a form of harmony and loyalty, which could potentially develop into a refusal to participate in the classroom. While “Being one of the gang” is often a term used to identify boisterous Western student behavior, King points out that a traditional notion of Japanese culture is that “those who do not speak much are positively regarded for being both wise and cultured” (p. 42). Through student interviews based on learner perspectives, the author clearly illustrates a student’s conscious decision to remain silent:

I worry about what the people around me think of me. If I made a mistake with a simple task- like everybody- um e:verybody knows the answer so say there are twenty-five students and if I make a mistake when all of those twenty-five people know the answer, then they would think ‘Ah::, this guy is stu:pid.’ ((laughs)) ... I worry about my pronunciation, and the combination of words, if they’re in the right order or not ... I don’t have confidence in my answer, then I really don’t like what people around me might be thinking of me (..)and that’s embarrassing (p. 114).

Educational

King addresses the predominance of teacher-centered instruction in Japanese EFL classes and reports that in one classroom observation the teacher conducted over 96 % of the talk during the class. The study further suggests that student comprehension of teacher talk resulted in 30–40 % of comprehensible input (p. 246). King's recommendation to appropriately adjust teacher discourse to EFL levels, as well as to decrease teacher talk time and increase student participation, should be nothing new to the veteran EFL instructor and should be well advised to aspiring EFL teachers who may wish to work in Japan.

For any EFL practitioner in Japan, it comes as no shock that King uses the term “disengagement” no less than five times to describe student activity in the classroom. The author's research reveals that over 20% of student's time was consumed by being off task and disengaged from the learning process (p. 95). Through interviews with students and teachers, the idea of non-engagement is clearly illustrated by a student comment on English class as “now is the chance to sleep ... it'll probably be alright” (p. 139). This student's attitude toward sleeping in class is surprisingly a behavior sometimes condoned by Japanese teachers. This is further confirmed by King who states that “I recorded in my research notes one conversation with a senior Japanese professor who informed me (not entirely in jest) that he was quite content for students to sleep while he taught them because slumbering learners tended to cause him fewer classroom management problems than the conscious ones” (pp. 139–140)!

Discussion

King's research certainly brings to light cultural issues that often bewilder foreign EFL instructors in Japan. Nevertheless, King clearly states that “... the stereotype of the silent Japanese learner needs to be approached with caution because one's performances of silence tend to be highly context-dependent and may not hold true across settings” (p. 149).

Of the several recommendations addressed on how to improve pre-tertiary EFL instruction in Japan, King suggests “that educators plan sufficient time within lessons for students to actually speak in the target language” (p. 169). While Japanese EFL student output is crucially important, King does not draw enough attention to the Japanese EFL student's limited opportunities to practice English outside of the classroom (Matsuoka and Evans, 2004; Olagboyega, 2011). According to Schmidt's work on *noticing*, “people learn about the things that they attend to and do not learn much about the things they do not attend to” (2010). Unlike an ESL student in Canada who most likely uses English to deal with daily needs, most Japanese EFL students do not need English in Japan to attend to the necessities of everyday life. This lack

of opportunity for L2 practice, makes it difficult for Japanese EFL students to see how “English works”.

Noticing

King highlights Swain’s work (1995) on *noticing/triggering*, which suggests that learners who speak in their L2 are prompted to recognize their linguistic problems consciously. Swain’s data, which draws from a Canadian French immersion setting, is a dramatically different context than the journey from Japanese to English. Considering that Canada’s official languages are French and English, it could be assumed that in most cases, Canadian French immersion students would have far more opportunity to *notice* French in everyday situations (i.e. back of cereal boxes), unlike the typical Japanese EFL student who possibly may not even encounter any meaningful English outside the EFL classroom. Swain’s research does support the significance of “speaking and writing as methods for L2 students to stretch language skills and potentially solve their own linguistic limitations through internalization (1998, pp. 126–127)”. L2 student output is essential, but equally important for many Japanese L2 students, is the incorporation of *scaffolded* lessons which integrate the four language skills and help students recognize and make connections between spoken, heard, read, and written English.

Scaffolding

As confirmed by Grabe (2009) “one major L2 issue is students’ more limited language knowledge in the L2 and the need for greater *scaffolding* with language support” (p. 192). As a veteran EFL practitioner in Japan, an activity which students seemed to find helpful, stemmed from *scaffolded* interactive lessons based on graded reader materials. The term *scaffolding*, which is seminal in the writing of Vygotsky and further addressed by Bruner, is best explained as follows:

Bruner (1978) believed that for learning to take place, appropriate social interactional frameworks must be provided. In the case of the young child learning language, the instructional component consists of the caregiver (normally the mother) providing a framework to allow the child to learn. To do this, the caregiver should always be one step ahead of the child (Vygotsky’s zone of proximal development), and by using contexts that are extremely familiar and routinized the caregiver can facilitate the child’s learning (Foley, 1994, p. 101)

While Japanese tertiary EFL students are not children, the lack of opportunity to *notice* English in everyday settings, and the fact that learning English is just one part of their very busy lives, makes a good case for EFL classes to be instructed in a step-by-step *scaffolding* manner. In order to supply ample opportunity for *noticing*, *scaffolding* provides the necessary step by step process in which language

learning material can be reused and reinforced.

Method

In the case of a graded reader-share for a beginner level Japanese EFL class, all that is required are materials similar to the graded reader series, *Building Blocks* (levels 1–3) (Shearon et al., 2012).

Step 1: Dictation: **A:** *What is the name of your book?* **B:** *Is it simple or difficult?* **C:** *What's it about?*

Step 2: Allow students to choose from several graded readers (beginner level 300–400 word count)

Step 3: Have students read their self-selected books.

Step 4: Have students answer the questions in the dictation.

Step 5: Using the dictation questions, have students share their book with a partner.

Step 6: Then have students read their partner's books.

Step 7: Have students return the books to the original reader.

Step 8: Repeat the process with another partner.

Note: As to which graded readers and time allotments best suit this activity, it is advised and teachers use discretion and make decisions based on what best suits the students.

The *scaffolding* provides the necessary opportunity to *notice* how English works and facilitates reinforcement of basic language skills. According to Graves et al., “reinforcement of learned materials that provide students with repeated exposures to words, concepts and skills has been long known to be effective for strengthening learning; and ... benefits the EFL students with little exposure to English” (2013, p. 32). As students take part in the reading-sharing steps, *scaffolding* replaces teacher instruction. Group interaction which involves the same task (reading and sharing) for everyone is easy to do, easy to ascertain and further reinforces the process by allowing students to learn from each other in a student-centered atmosphere. The graded readers provide material that facilitates easy language input and output.

Student feedback following a graded reader-share included comments that indicated a sense of accomplishment based on being able to read and talk about books in English as well as a feeling of a new sense of comradery with classmates. (Doiron, Personal communication, 2019).

Conclusion

Silence in the Second Language Classroom encourages reflection on psychological, sociological, and educational issues that may potentially explain some of the meaning behind the voluntary quietness often found in the Japanese EFL classroom. As Japan continues to try to build a higher proficiency in English,

King's work on silence provides a foundation that warrants further exploration. Perhaps future research could also include the importance of *noticing* as well as the use of *scaffolding* in regards to increasing student output in Japanese EFL classes.

Note

- 1 The EF **English Proficiency Index** (EF EPI) attempts to rank countries by the average level of **English language skills** amongst those adults who took the EF test. <https://www.ef.com/wwen/epi/>

Works cited

- Doi, Takeo. "Amoe: A Key Concept for Understanding Japanese Personality Structure" *Japanese Culture and Behavior: Selected Readings*, edited by Takie Sugiyama Lebra and William P. Lebra, 1986, pp. 121–130.
- Doiron, Heather. Classroom Observation, Aichi Gakuin University, October 2019.
- Foley, Joseph. "Key concepts in ELT". *ELT Journal*, vol. 48, no. 2, 1994, pp. 101–102.
- Fujiwara, Gakushi. "Japan ranked 49th in English proficiency, rated 'low' again": The Asahi Shimbun, <http://www.asahi.com/ajw/articles/AJ201811120058.html> accessed April 6, 2019.
- Grabe, William. *Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice*. Cambridge University Press, 2009.
- Graves, Micheal, F., et al. *Teaching vocabulary to English language learners*. New York: Teachers College Press, 2013.
- King, James. *Silence in the Second Language Classroom*. Palgrave, 2013.
- McDougall, Glenn. *Building Blocks Library*. Matsuka Phonics Inc, 2009.
- Matsuoka, Rieko and David Richard Evans. "Socio-cognitive Approach in Second Language Acquisition Research." *National College of Nursing Japan*, vol. 3, no. 1, 2004, pp. 2–10.
- OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri. —*The Language "Noticing" Hypothesis—Towards Effective Teaching Methods in Japan*. Research Report: Graduate School of Engineering and Resources Science, Akita University 2013, vol. 34 (October), pp. 29–34., from https://air.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2170&file_id...1 accessed March 24th, 2019.
- Schmidt, Richard. "Attention, awareness, and individual differences in language learning", edited by W. M. Chan, S. Chi, K. N. Cin, J. Istanto, M. Nagami, J. W. Sew, T. Suthiwan, and I. Walker, Proceedings of CLaSiC 2010, Singapore. Singapore: National University of Singapore, Centre for Language Studies, 2010, pp. 721–737. From <https://www.scribd.com/document/118332329/Attention-awareness-and-individual-differences> accessed October, 11th, 2019.
- Swain, Merrill. "Three functions of output in second language learning", *Principles and Practice in Applied Linguistics*: edited by Guy Cook & Barbara Seidlhofer, Oxford University Press, 1995, pp. 125–144.
- Torikai, Kumiko. *Chronic Reforms and the Crisis in English Education*: Nippon.com. From <https://www.nippon.com/en/currents/d00412/chronic-reforms-and-the-crisis-in-english-education.html> Accessed September 1, 2019.

日本の大学における教養科目としての 「韓国語学習」

——「中級クラス」受講者のアンケート調査結果をもとに——

文 嬉 眞・金 美 淑

1. はじめに

本稿は「日本の大学における教養科目としての『韓国語学習』」の現況とその現状分析を中心テーマとする論稿である。このテーマは前稿¹⁾に引き続くものとして、愛知学院大学（以下、本学）における中級クラスの受講者を対象に実施したアンケート調査結果を分析したものである。本稿の主な構成は、本学で開講されている2年次以降で選択可能な中級クラスの全ての韓国語科目の受講者を対象に3回の設問調査を実施し、それを分析する内容となっている。具体的にいえば、本学で教養科目として開講されている韓国語初級を学習した後に、中級クラスに進級する学生が他の第2外国語に比べて多いということに着目した。その受講者の初級から中級クラスへの受講率、韓国語能力（自己評価）、学習到達目標、活用分野を調査し、「初級と中級」および「男女学生」の違いについて計量的な方法を用いて比較分析を行った。

前稿²⁾では、本学における韓国語の初級クラスの受講者の場合、受講前の学習到達目標を高く設定しているほど、その学習終了時の満足度が高いこと、また男女別では、男子学生に比べて女子学生が学習到達目標の設定が高く、その目標実現度も高いことを明らかにした。このような状況が中級クラスの受講者においても同様の傾向が示されるかどうかを確認するとともに、韓国語の学習現況を綿密に分析して、その結果をもとに本学の韓国語教育の方向設定や授業改善への取り組みの活用と反映を行うことを本稿の目的とする。

2. 韓国語中級クラスの開講科目について

本学の第2外国語としては、中国語、ドイツ語、フランス語、韓国語の4言語が開講されている。その中で教養教育科目としての韓国語科目について簡単に紹介すると、1年次から受講できる週1コマ15回授業の「韓国語Ⅰ・Ⅱ」（選択必修科目）と「韓国語Ⅰ・Ⅱ（基礎）」（選択科目）がある。その後2年次からの選択科目として「韓国語会話Ⅰ・Ⅱ」³⁾、「韓国語Ⅲ・Ⅳ（読解）」、「韓国語Ⅲ・Ⅳ（表現）」、「韓国語Ⅲ・Ⅳ（総合）」の8科目が開講されている。韓国語学習に意欲のある学生はこれらの科目を受講することにより、さらに上の中級レベルの学習内容へ進むことが可能となっている。

3. 初級クラスから中級クラスへの受講者数の推移

まず、本学の第2外国語の中級クラス科目の全受講者数〈表1〉を簡単に見てみると以下のとおりである。中級クラスの受講者数は2015年度春学期の場合、中国語は18名（4コマ）、フランス語は10名（3コマ）、ドイツ語は26名（3コマ）、韓国語は87名（6コマ）である。また2年後の2017年度春学期の場合、中国語は31名（4コマ）、フランス語は10名（2コマ）、ドイツ語は35名（3コマ）、韓国語は123名（6コマ）である。これはどの第2外国語においても中級クラスへ進級する受講者が増加傾向であることが示されている。2015年度と2017年度の中級クラスの受講者数の推移を見るとともに、第2外国語に対する学習意欲を持った学生が増えていることについて触れておきたい。

なお、2016年度は中級クラスのアンケート調査実施において、ある中級クラスの2回目のアンケートが未回収となり、有効な調査結果が見込めないと判断したため、本稿では採用していない。

〈表1〉第2外国語別中級クラスの受講者数⁴⁾（春学期のみの人数）

外国語 年度	中国語	フランス語	ドイツ語	韓国語
2015	18	10	26	87
2017	31	10	35	123

次の〈表2〉は2015年度と2017年度春学期の韓国語中級クラスのキャンパス別（日進キャンパスと名城公園キャンパス）の受講者数を表したものである。全体的に受講者数が増加する傾向を見せているが、2017年度の春学期の名城公園キャンパスの「韓国語会話Ⅰ」の受講者

数が2015年度に比べ4倍も増加していることが特に顕著である。

〈表2〉キャンパス別韓国語中級クラス別の受講者数（春学期のみ）

キャンパス 科目	2015年度		2017年度	
	日進	名城	日進	名城
韓国語会話Ⅰ	14	9	18	36
韓国語Ⅲ（表現）	15	9	21	
韓国語Ⅲ（総合）	16		26	11
韓国語Ⅲ（読解）	24		11	
計	87		123	

「／」はその年度に開講されていない科目を表す。

次に、韓国語受講者の初級から中級クラスへの受講率を調べるため、該当する中級クラスの前年度の初級クラス受講者数を把握し、前年度の初級クラスと次の年度の中級クラスの受講者数を〈表3〉にまとめた。なお、中級クラスの受講者全員が前年度に初級クラスを受講しているわけではないが、後述の項で示されているとおり、受講している者が圧倒的に多いため、本比較は有効なものとする。

〈表3〉初級クラスとその次年度の中級クラスの受講者数

年度（春学期）	2014年度 初級受講者数	2015年度 中級受講者（率）	2016年度 初級受講者数	2017年度 中級受講者（率）
外国語				
韓国語	470	87（18.5%）	545	123（22.6%）

初級から中級クラスへと進む受講者の比率を見てみると、2015年度の中級クラスは18.5%、2017年度は22.6%の受講率を示している。これはパーセンテージの増減について議論する訳ではなく、初級韓国語を学習した学生の約5分の1もの受講者が中級韓国語に関心を示し、上のクラスへ進むということは注目に値する。そして、このように上のクラスへの関心を示す受講学生が多いということを考えれば、韓国語を教える側の責任感を重く受け止める必要がある。

4. 中級クラス受講者に対するアンケート調査の結果と分析

4.1 アンケート調査の目的

上述したように、韓国語が他の第2外国語に比べて中級クラスに進む受講学生が多いことには、何らかの理由があると思われる。初級から中級クラスへと進む受講者が当該クラスを選択する現況を把握し、韓国語能力（自己評価）や学習到達目標、活用分野などを分析することに

より、学生の学習実態と要望に合う中級クラス授業の在り方を考え、授業改善に資するものとするのがそのねらいとなる。

4.2 調査の概要

本調査の概要は、以下のとおりである。

- 1) 実施時期 : 2015年度及び2017年度に各3回（春学期の2回目および14回目、秋学期の15回目）実施⁵⁾
- 2) 調査方式 : 無記名による選択回答及び記述形式
- 3) 調査対象 : 2年次以降の韓国語の全ての中級クラス受講者
- 4) 有効回答者数 : 下表のとおりとなる

年度 実施時期	2015年度		2017年度	
	男性	女性	男性	女性
1 回目（4 月）	21	41	37	61
2 回目（7 月）	26	42	38	65
3 回目（12 月）	17	37	17	58

4.3 調査内容と回答結果について

4.3.1 アンケート回答者の男女・学年の内訳

2015年度および2017年度における春学期中級クラスの受講者に対して実施した有効回答者のみの調査結果を男女・学年別にまとめたものを以下の〈表4〉に示している。

それを学年別に見てみると、2年生が114人と最も多く、3年生が24人、4年生が12人と続く。本学の中級クラスの受講者の場合、2年生が圧倒的に多く、1年次の時に初級クラスを受講し、引き続き2年次に当該クラスを選択していることは注目に値する。

また性別の内訳では、男子学生が55名、女子学生が95名であって、女子学生のほうが多く受講している。そして、本学で1年次から受講可能な初級クラスの受講者数の男女別の内訳を調べてみると、2014年度の男子学生は202名、女子学生は137名、2016年度の男子学生は243名、女子学生は147名である。このように初級受講者数では男子学生が約1.5倍以上多く受講しているが、次の中級クラスでは女子学生が約2倍多く受講する状況になっている。その実態から考えると、女子学生の方が韓国語に対する上達志向と学習意欲の強さをもっていることが伺える。

〈表4〉男女・学年別（有効回答者数のみ）⁶⁾

性別 \ 学年	2 年生	3 年生	4 年生	計
男性	47	6	2	55
女性	67	18	10	95
計	114	24	12	150

4.3.2 韓国語学習期間と既習科目数

以下の〈表5〉〈表6〉は受講者の学習期間と既習科目数を表したものである。

韓国語学習期間をみると、1年以上2年未満の学生が73名と最も多い。これは中級クラスの受講者の主体が2年生であることと整合性が取れる結果となっている。しかし、その次に多いのは1年未満の学習期間の学生58名で、これは本学で2年生から選択可能な科目としておかれた「韓国語会話Ⅰ」（日進・名城公園キャンパスとも開講）に、学習期間が1年にも満たない学生が多く受講していることに起因している。

〈表5〉学習期間

性別 \ 学習期間	0 年～1 年	1 年～2 年	2 年～3 年	3 年～
男性	30	21	1	1
女性	28	52	12	4
計	58	73	13	5

この調査の回答学生に対して、過去に受講したことがある韓国語科目について問うた結果が、〈表6〉のとおりとなっている。既習済みの科目⁷⁾としては2科目の83名が一番多く、次に0科目23名、1科目21名と続く。これも中級クラスは2年次生が多く受講していることで、1年次の時、韓国語初級科目を受講し、引き続き中級科目を選択する結果となっているためである。しかし、韓国語関連の未受講者も23名いることで、前述のとおり、「韓国語会話Ⅰ」クラスに多くみられ、調査の結果、23名中22名が当該科目を受講している学生であることが判明した。つまり「韓国語会話」科目について中級クラスに位置づけるかの問題はあるものの、本稿では2年次以降の受講可能科目であるため中級クラスの対象科目として含め、調査を行っている。

〈表6〉既習科目数

性別 \ 科目数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
男性	15	9	30	0	2	0	1	1	0
女性	8	12	53	7	9	0	1	0	1
計	23	21	83	7	11	0	2	1	1

4.3.3 韓国語能力（自己評価）

中級クラスの受講者に対しては、韓国語能力（自己評価）に関する調査を実施し、1回目・2回目・3回目のアンケート調査をもとにその推移をまとめた⁸⁾。ただし、中級クラスには韓国語を初めて学習する学生も一定数存在するので、韓国語学習期間が1年未満の学生は除外し、1年以上の学習期間を有する学生のみをその対象に絞って男女別にまとめた結果が、以下の〈表7〉である。

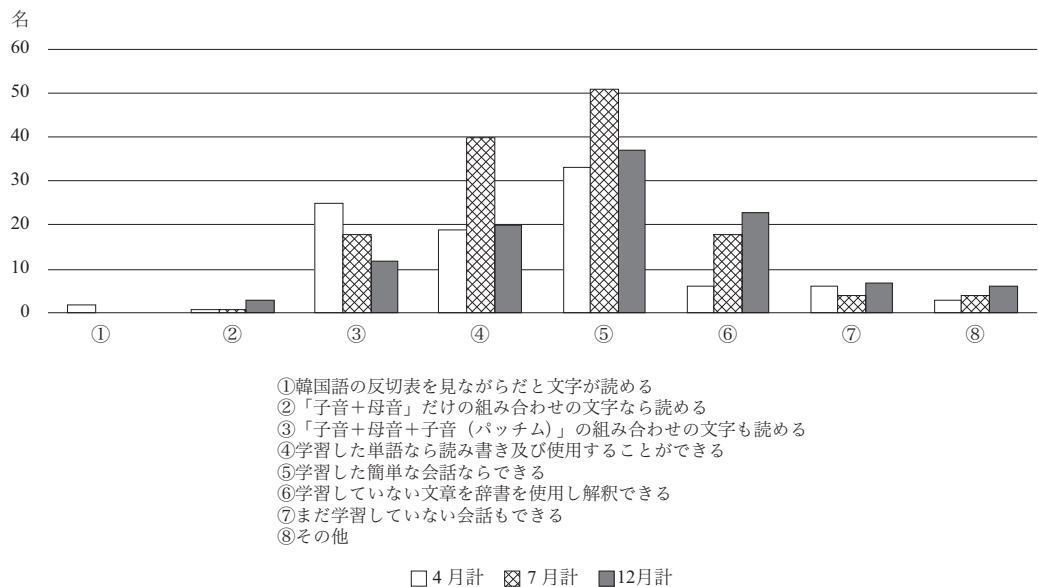
〈表7〉「学習期間1年以上」の男女別韓国語能力（自己評価）

韓国語能力	1回（4月）			2回（7月）			3回（12月）		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
①韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める	1	1	2	0	0	0	0	0	0
②「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める	0	1	1	0	1	1	1	2	3
③「子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める	10	15	25	12	6	18	6	6	12
④学習した単語なら読み書き及び使用することができる	7	12	19	11	29	40	8	12	20
⑤学習した簡単な会話ならできる	6	27	33	14	37	51	8	29	37
⑥学習していない文章を辞書を使用し解釈できる	0	6	6	2	16	18	2	21	23
⑦まだ学習していない会話もできる	3	3	6	2	2	4	1	6	7
⑧その他	0	3	3	1	3	4	1	5	6
平均値	4.1	4.6	4.4	4.4	4.8	4.7	4.4	5.2	5.0

韓国語能力のレベル別の人数（男女計）は、4月のアンケートの時点では「⑤学習した簡単な会話ならできる」が33名と一番多く、次に「③子音+母音+子音（パッチム）」の組み合わせの文字も読める」が25名と続く。2回目の調査である7月の時点では⑤が51名と一番多く、4月の時点の調査と変わらないが、その次に多いのは「④学習した単語なら読み書き及び使用することができる」が40名と続くようになる。さらに3回目調査の12月時点になると、引き

続き⑤の学生が37名と一番多いのは変わらないが、その次に「⑥学習していない文章を辞書を使用し解釈できる」と答えた学生23名となっている。

これは4月から7月、そして12月へと学習期間の経過とともに、韓国語能力が確実に向上していることが読み取れる。また〈図1〉では学習期間1年以上の韓国語能力の1年間の変化をグラフに表している。このグラフは受講者の能力が向上していることを明確に表している。これはあくまでも自己評価ではあるものの、自ら韓国語レベルが確実に向上しているという実体験を測ったものとして、学習者における語学力に対する満足感（自信感）の現れを示しているものと思われる。



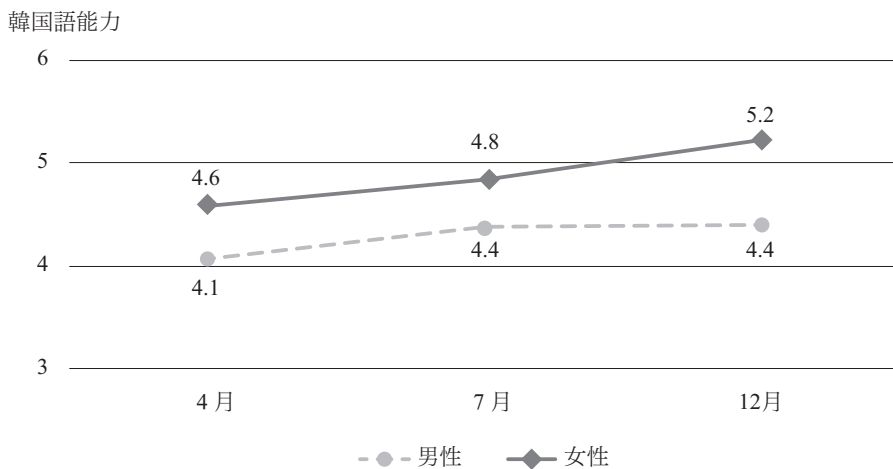
〈図1〉「学習期間1年以上」の韓国語能力（自己評価）の1年間の変化

次に、男女別に分析してみると、男子学生の韓国語能力の平均値⁹⁾は4月時点で〈4.1〉、7月時点で〈4.4〉、12月時点で〈4.4〉であったのに対し、女子学生の韓国語能力の平均値は4月時点で〈4.6〉、7月時点で〈4.8〉、12月時点で〈5.2〉という数値を示した。

男子学生の1年間の韓国語能力が平均的に〈4.1〉から〈4.4〉と「0.3」ポイント伸びているのに対し、女子学生の場合は〈4.6〉から〈5.2〉と「0.6」ポイント伸びていることがこの結果から明らかになった。

韓国語中級クラスのスタートの4月時点で韓国語能力を男子学生は「③」「④」「⑤」の順に、女子学生は「⑤」「③」「④」の順に回答しているものの、男女ともに韓国語能力の平均値は「④」と「⑤」のレベルの間にあることは変わらない。それが学習の終了時期に近い12月

の時点で女子学生の韓国語能力の平均値は〈5.2〉まで上昇し、男子学生の韓国語能力の平均値は7月時点の平均値と同じ〈4.4〉に留まっていることが分かる。この調査から、学習期間が長くなるに連れ、女子学生のほうが男子学生より韓国語能力がさらに高まり、その差が広がる傾向を示している。ここで問題点として取り上げるべきことは男子学生が一定期間で韓国語能力が伸びないと実感する理由である。それを探ることは今後の性別による能力の差を縮めることに繋がると考えられる。



〈図2〉1年間の韓国語能力の変化（男女比）

4.3.4 韓国語学習の到達目標

本項では受講者自身が学習期間の経過に伴って、到達目標に変化が生じたかを設問調査したものである。〈表8〉は初級クラスの学生¹⁰⁾と中級クラスの学生（学習期間が1年以上の学生に限定）の4月・7月・12月（各1回・2回・3回）の到達目標別に回答した人数¹¹⁾をまとめたものである¹²⁾。

この調査結果によると、韓国語初級クラスの学習スタート時点での到達目標の平均値は男子学生が〈2.0〉、女子学生は〈2.2〉であったが、1年間の学習期間が終了した3回目の調査の際では、男子学生は〈2.3〉、女子学生は〈2.5〉と、学習期間が進むことによって男女ともに到達目標が「0.3」ポイント向上している。ここで注目すべきことは2回目の到達目標の平均値が男女ともわずかではあるが、低くなる傾向を示しているという点である。この傾向は、1回目の4月段階で実施した調査はまだ文字を学習していない状態で、到達目標を少なからず高く置いたものの、学習進度が進むにつれ語学学習の難しさを感じるものが2回目の調査で現れ、3回目の1年間の学習期間の経過とともに韓国語の「読み書き」への自信感が備わった目標として

〈表 8〉学習の到達目標（初級クラス～中級クラス）

到達目標	男性						女性					
	初級クラス			中級クラス (1年以上)			初級クラス			中級クラス (1年以上)		
	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回	1回	2回	3回
①簡単なあいさつができるまで	19	28	16	3	6	4	17	11	8	2	3	1
②簡単な会話が成り立つまで	39	29	32	9	14	14	36	40	38	15	20	21
③一人で韓国での旅行ができるまで	11	10	10	8	14	5	16	16	13	17	26	23
④簡単な本が読めるまで	4	3	3	2	3	3	2	2	1	5	10	12
⑤韓国語の検定試験に受かるまで	1	1	6	5	6	1	3	0	7	29	33	25
⑥その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	3
平均値	2.0	1.9	2.3	2.9	2.7	2.4	2.2	2.1	2.5	3.6	3.6	3.6

現れたものと推察される。

さらに、中級クラスの1回目（4月）の調査では男子学生の到達目標の平均値は〈2.9〉、女子学生は〈3.6〉と非常に高くなっている。1年間の初級クラスの韓国語学習が終了した後も、韓国語をさらに高いレベルまで学習したいという意欲の高い学生が多く中級クラスを選択していることが伺われる。

そして、中級クラスの学習期間が進むにつれ、男女間の差が生まれることになる。まず、男子学生の場合、中級クラスの4月の到達目標の平均値が〈2.9〉であったが、学習途中の7月には〈2.7〉、終了時の12月には〈2.4〉と逆に下がる結果となる。しかし女子学生の場合は〈3.6〉という4月の到達目標レベルが7月・12月とも変わっていない。このことから、韓国語中級クラスの学習者においては、男子学生よりも女子学生のほうが、さらに高いレベルの韓国語能力を身につけようとする動機づけと意欲の強さが見受けられる。

しかしながら男子学生の場合、中級クラスの授業を選択した時点では勉学意欲も高く到達目標も高かったが、中級クラスの授業の難しさとともに徐々に現実的に到達可能な範囲のレベルまで目標を下げていくと推察される。これは前述のような初級クラスにおける男子学生の到達目標が下がる傾向と同様の様子を見せていることから、それについての詳細な分析と改善方法を探っていくことが今後の課題となる。

4.3.5 活用分野

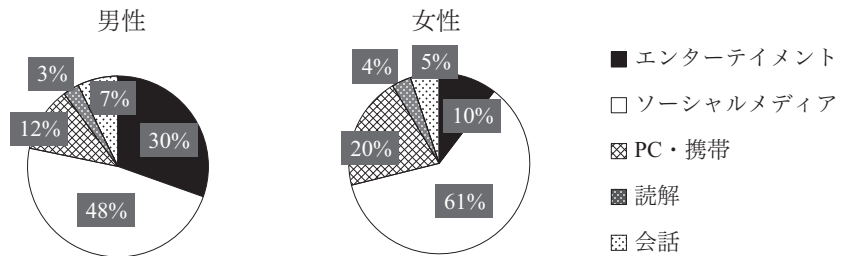
中級クラスの受講者に対し、身につけた韓国語能力を具体的にどのような場面で活用しているかを設問調査し、その回答結果を男女別にまとめたのが次の〈表 9〉である。

〈表9〉韓国語の活用分野

目的	分野	項目	男性		女性	
			小計	合計	小計	合計
聞く (見る)	エンターテインメント	映画	10	21	1	24
		ドラマ	4		10	
		TV	0		2	
		音楽	7		11	
書く (読む)	ソーシャルメディア	youtube	13	33	57	141
		Facebook	0		3	
		SNS	5		7	
		Instagram	2		11	
		LINE	11		44	
		KakaoTalk	2		19	
	PC・携帯	検索	7	8	45	47
		PC 文章作成	1		0	
		メール	0		1	
		iPhone 言語設定	0		1	
	読解	翻訳	1	2	1	8
		手紙	1		6	
		本	0		1	
話す	会話	会話	4	5	6	12
		サイン会	0		2	
		バイト先	0		1	
		旅行	1		3	

上記の〈表9〉のとおり、エンターテインメントとソーシャルメディアの分野で活用している傾向が強く、特に youtube と検索機能の利用のために韓国語を使用している受講者が男女とも多く見られる。この結果から推察すると、映画、ドラマ、K-POP などの韓流文化に受講者が日頃から慣れ親しんでいることの現れだと判断される。この映像・音楽等に対する需要状況が、他の第2外国語と比較して中級クラスの受講者が多く、また韓国語学習に対する意欲を引き出している一つの主因だと考えられる。

その一方で、上記の調査結果として「読解」と「話す」分野で利用が少ない。また文法や語彙力を要する「読解」と、「話す」という実用的な会話の使用においてはその機会が非常に限られていることも明らかとなった。そのため、今後の授業改善のためにも会話ができる多くの機会と多様な語彙を使う学習機会を設けることが必要であると思われる。



〈図3〉韓国語活用分野（男女別）

上記の〈図3〉に見られるように、男女学生ともソーシャルメディアの分野において最も多く利用していることが示されている。その中で、男子学生の場合、エンターテインメントの分野において女子学生より韓国語を活用している割合が高く示されている。これは男子学生が女子学生よりエンターテインメントという「一人で楽しむ」ことができることを好む傾向を示している。これに対して、女子学生は男子学生よりも「誰かとコミュニケーションしながら繋がる」ことを好む傾向があると推察できる。以上の調査結果から韓国語の学習とその活用分野での男女間の相違点が見られる点が注目に値する。

5. おわりに

本稿は、本学の中級クラスの受講者を対象にしてアンケート調査を実施し、その調査結果から受講者の韓国語能力、学習到達目標、活用分野について分析を行った。これは初級クラス受講者を対象に実施した設問調査を分析した前稿¹³⁾に引き続くものであるため、初級から中級へ進級する受講者の内面的な志向をも含めて、明確にすることができた。

具体的には、韓国語を選択する中級クラスの学生は他の第2外国語と比べて多く、初級クラスが終了した後も引き続き韓国語学習を継続し、能力を高めたい学生が多いことである。また韓国語の活用分野で見られたように多くの学生が大学入学以前から流行している韓国の音楽・ドラマ・映画等の文化に慣れ親しんでいることである。これこそが他の第2外国語にはあまり見られない韓国語学習への親しみと学習意欲の原動力となっていることが伺える。さらに、韓国語能力や学習到達目標、韓国語の活用分野について男女学生の違いに一定の差が見られること、などをつまびらかにすることができた。この男女学生の差をどのように埋めるかは今後の課題であるものの、その活用分野で示されている内容から、男女学習者における韓国語使用分野の傾向に関わる知見が得られている。これらの側面も含めて韓国語の授業で積極的かつ実践

的に応用していくことも今後の改善策に繋がると思われる。

以上のような分析結果の明確性、信頼性をさらに高めるためには、受講者に対して実際の「実力テスト」を実施することをも視野に入れることも、今後の課題として考えておきたい。その際には初級クラスで実施している実力テストを中級クラスでも実施する計画である。

参考資料 実施アンケート

「韓国語中級クラス」に関するアンケートⅠ(日進)

問1) 性別を教えてください。

- ① 男性 ② 女性

問2) 学科と学年を教えてください。

問3) 韓国語の学習期間はどれくらいですか？

- ① 1年未満
② 1年以上～2年未満
③ 2年以上～3年未満
④ 3年以上

問4) 昨年まで受講した科目に○をつけてください。

韓国語Ⅰ(必修)、韓国語Ⅱ(必修)、韓国語Ⅰ(基礎)、韓国語Ⅱ(基礎)
韓国語会話Ⅰ(水2)、韓国語会話Ⅱ(水2)、韓国語Ⅲ(水3)、韓国語Ⅳ(水3)
韓国語Ⅲ(月2)、韓国語Ⅳ(月2)、韓国語Ⅲ(木4)、韓国語Ⅳ(木4)

問5) 現在受講している韓国語関連の科目をすべて記入してください。

問6) あなたの現在の韓国語の能力はどれくらいですか。(自己判断でよい)

- ① 韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
② 「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
③ 「子音+母音+子音 (パッチム)」の組み合わせの文字も読める。
④ 学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑤ 学習した簡単な会話ならできる。
⑥ 学習していない文章を辞書を使用し解釈できる。
⑦ まだ学習していない会話もできる。
⑧ その他(例・所持している韓国語関連の検定の級などー)

問7) 韓国語科目を選んでよかったと思いますか。

その理由を書いてください。

- ① はい ② いいえ

問8) 「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。(自由記述)

問9) 大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。

- ① 簡単なあいさつができるまで
② 簡単な会話が成り立つまで
③ 一人で韓国での旅行ができるまで
④ 簡単な本が読めるまで
⑤ 韓国語の検定試験に受かるまで
⑥ その他 ()

問 10) 韓国語の学習後どこに役立てたいと思いますか。

- ① 旅行
- ② 音楽やドラマや映画などの鑑賞
- ③ 語学留学
- ④ 就職（語学能力をアピールするため）
- ⑤ 将来韓国語を使った専門的な職につきたい
- ⑥ その他（ ）

問 11) 韓国語の学習においてより分かりやすい学習をするために、取り入れてほしい点がありますか。今後の参考にするので教えてください。

問 12) 英語に対して苦手意識を持っていますか。

- ① はい ② いいえ

問 12) で「①はい」と答えた人に質問します。

12-1) 苦手意識を持つ理由を教えてください。

問 13) 英語以外で学習したことのある外国語はありますか。

「韓国語中級クラス」に関するアンケートⅡ(日進)

問1) 性別を教えてください。

- ① 男性 ② 女性

問2) 学科と学年を教えてください。

問3) 韓国語の学習期間はどれくらいですか？

- ① 1年未満
② 1年以上～2年未満
③ 2年以上～3年未満
④ 3年以上

問4) 昨年まで受講した科目に○をつけてください。

韓国語Ⅰ(必修)、韓国語Ⅱ(必修)、韓国語Ⅰ(基礎)、韓国語Ⅱ(基礎)
韓国語会話Ⅰ(水2)、韓国語会話Ⅱ(水2)、韓国語Ⅲ(水3)、韓国語Ⅳ(水3)
韓国語Ⅲ(月2)、韓国語Ⅳ(月2)、韓国語Ⅲ(木4)、韓国語Ⅳ(木4)

問5) 現在受講している韓国語関連の科目をすべて記入してください。

問6) あなたの現在の韓国語の能力はどれくらいですか。(自己判断でよい)

- ① 韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
② 「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
③ 「子音+母音+子音 (パッチム)」の組み合わせの文字も読める。
④ 学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑤ 学習した簡単な会話ならできる。
⑥ 学習していない文章を辞書を使用し解釈できる。
⑦ まだ学習していない会話もできる。
⑧ その他(例・所持している韓国語関連の検定の級などー)

問7) 韓国語科目を選んでよかったと思いますか。

その理由を書いてください。

- ① はい ② いいえ

問8) 「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。(自由記述)

問9) 大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。

- ① 簡単なあいさつができるまで
② 簡単な会話が成り立つまで
③ 一人で韓国での旅行ができるまで
④ 簡単な本が読めるまで
⑤ 韓国語の検定試験に受かるまで
⑥ その他 ()

問 10) 韓国語の学習後どこに役立てたいと思いますか。

- ① 旅行
- ② 音楽やドラマや映画などの鑑賞
- ③ 語学留学
- ④ 就職（語学能力をアピールするため）
- ⑤ 将来韓国語を使った専門的な職につきたい
- ⑥ その他（ ）

問 11) 約4か月間韓国語を学習しました。その間に自分の韓国語のレベルがどの分野で伸びたと思いますか。(複数回答可)

- ① 変化なし
- ② 発音
- ③ 文法
- ④ 語彙
- ⑤ 会話
- ⑥ 読解

問 12) 韓国語を活用しているところがありますか。

(例：検索・手紙・YouTube・ラインなど)

問 13) 韓国語の学習においてより分かりやすい学習をするために、取り入れてほしい点がありますか。今後の参考にするので教えてください。

問 14) 過去もしくは現在で受講している科目の他に、韓国語関連の授業で実施してほしい講義があれば詳しく書いてください。

「韓国語中級クラス」に関するアンケートⅢ(日進)

問1) 性別を教えてください。

- ① 男性 ② 女性

問2) 学科と学年を教えてください。

問3) 韓国語の学習期間はどれくらいですか？

- ① 1年未満
② 1年以上～2年未満
③ 2年以上～3年未満
④ 3年以上

問4) 昨年まで受講した科目に○をつけてください。

韓国語Ⅰ(必修)、韓国語Ⅱ(必修)、韓国語Ⅰ(基礎)、韓国語Ⅱ(基礎)
韓国語会話Ⅰ(水2)、韓国語会話Ⅱ(水2)、韓国語Ⅲ(水3)、韓国語Ⅳ(水3)
韓国語Ⅲ(月2)、韓国語Ⅳ(月2)、韓国語Ⅲ(木4)、韓国語Ⅳ(木4)

問5) 現在受講している韓国語関連の科目をすべて記入してください。

問6) あなたの現在の韓国語の能力はどれくらいですか。(自己判断でよい)

- ① 韓国語の反切表を見ながらだと文字が読める。
② 「子音+母音」だけの組み合わせの文字なら読める。
③ 「子音+母音+子音 (パッチム)」の組み合わせの文字も読める。
④ 学習した単語なら読み書き及び使用することができる。
⑤ 学習した簡単な会話ならできる。
⑥ 学習していない文章は辞書を使用しながら解釈できる。
⑦ まだ学習していない会話もできる。
⑧ その他(例・所持している韓国語関連の検定の級などー)

問7) 韓国語科目を選んでよかったと思いますか。

その理由を書いてください。

- ① はい ② いいえ

問8) 「韓国語」についてのイメージに変化はありますか。(自由記述)

問9) 大学の在学期間中韓国語をどのレベルまで学習したいと思いますか。

- ① 簡単なあいさつができるまで
② 簡単な会話が成り立つまで
③ 一人で韓国での旅行ができるまで
④ 簡単な本が読めるまで
⑤ 韓国語の検定試験に受かるまで
⑥ その他 ()

問 10) 韓国語の学習後どこに役立てたいと思いますか。

- ① 旅行
- ② 音楽やドラマや映画などの鑑賞
- ③ 語学留学
- ④ 就職（語学能力をアピールするため）
- ⑤ 将来韓国語を使った専門的な職につきたい
- ⑥ その他（ ）

問 11) 当該の授業で自分の韓国語のレベルがどの分野で伸びたと思いますか。
(複数回答可)

- ① 変化なし
- ② 発音
- ③ 文法
- ④ 語彙
- ⑤ 会話
- ⑥ 読解

問 12) 韓国語を活用しているところがありますか。

(例：検索・手紙・YouTube・ラインなど)

問 13) 韓国語の学習においてより分かりやすい学習をするために、取り入れてほしい点がありますか。今後の参考にするので教えてください。

問 14) 過去もしくは現在で受講している科目の他に、韓国語関連の授業で実施してほしい講義があれば詳しく書いてください。

問 15) 来年度も引き続き韓国語の選択科目を受講したいと思いますか。

(現 4 年生は除外)

- ① はい
- ② いいえ

参考文献

- ・ 오고시 나오키 (2015) 「일본 대학의 한국어교육과 한국어 교육과정」 『국제한국어교육학회 제25차 국제학술대회 논문집』
- ・ 오기노 신사쿠 (2015) 「일본 대학 내 교양으로서의 한국어 교육 발전 방향 연구—국립 시즈오카대학의 한국어 학습자의 요구분석 결과를 중심으로—」 『국제한국어교육학회 제 25 차 국제 학술대회 논문집』
- ・ 金敬鎬 (2009) 「日本語母語話者の韓国語学習に関する意識調査」 『日白大学人文学研究』 第 5 号
- ・ 朴珍希 (2016) 「日本における韓国語教育に関する研究—大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題—」 『岡山県立大学教育研究紀要』 第 1 巻 1 号
- ・ 文嬉眞・金美淑 (2014) 「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析 (1) —」 『愛知学院大学教養部紀要』 第 61 巻 第 4 号
- ・ 文嬉眞・金美淑 (2015) 「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析 (2) —」 『愛知学院大学教養部紀要』 第 62 巻 第 3 号
- ・ 文嬉眞・金美淑 (2018) 「日本の大学における第 2 外国語としての韓国語教育の位相と現況—愛知学院大学の必修科目を事例として—」 『韓国語教育研究』 第 8 号

注

- 1) 文嬉眞・金美淑 (2014) 「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析 (1) —」 『愛知学院大学教養部紀要』 第 61 巻 第 4 号
文嬉眞・金美淑 (2015) 「日本の大学機関における「韓国語学習」—愛知学院大学の「韓国語」選択必修科目に関するアンケート結果とその分析 (2) —」 『愛知学院大学教養部紀要』 第 62 巻 第 3 号
文嬉眞・金美淑 (2018) 「日本の大学における第 2 外国語としての韓国語教育の位相と現況—愛知学院大学の必修科目を事例として—」 『韓国語教育研究』 第 8 号
- 2) 文嬉眞・金美淑 (2015)
- 3) 本科目は 2 年次生以降の選択科目であるけれども、韓国語未学習者も選択している。
- 4) 受講者数は 2015 年度と 2017 年度の春学期の各中級クラス受講者数を合算したものである。
- 5) 2016 年度の中級クラスのアンケートは一部未回収であったため、2016 年度のアンケートは有効性なしと見なす。
- 6) 2015 年度と 2017 年度の春学期中級クラスアンケート回答者数の合計は 160 名であるが、学年について 10 名が無回答であったため、合計者数が 150 名となっている。
- 7) 科目数の数え方は学期ごとの科目をそれぞれカウントしている。例えば、1 年次の「韓国語 I」と「韓国語 II」は 2 科目を既習科目と数える。
- 8) 文嬉眞・金美淑 (2015) において、初級クラス (1 年次) の終了時点での韓国語能力の平均値は、男子学生は「3.8」女子学生は「4.6」であった。
- 9) ①～⑧の項目をそれぞれ 1～8 のレベル段階に数値化したときの平均値。
- 10) 初級クラスのデータは文嬉眞・金美淑 (2015) による。2013 年度の調査。
- 11) 中級クラスは 2015 年度と 2017 年度の調査人数を合算したものである。
- 12) ⑥その他の内訳 (自由記述) は、初級クラスは「単位がとれればいい」、「中級クラスの 2 回目は「韓国語

のように」3回目は「会話がもっとできるようになるまで、字幕なしで映画がみられるようになるまで、少し難しい会話ができるまで」であった。

13) 文嬉眞・金美淑(2014)

文嬉眞・金美淑(2015)

文嬉眞・金美淑(2018)

来迎院如来蔵所蔵の

『相好文字抄』について

南部忠明・河野敏宏

目次

- 一、はじめに（本稿の目的）
- 二、相好とは何か
- 三、相好語への加注にみられる『相好文字抄』の編纂目的
- 四、『相好文字抄』における相好語の出典
- 五、結語

一、はじめに（本稿の目的）

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』は、阿弥陀仏をはじめとする諸仏の特徴である「三十二相八十随好」について、諸経から相好語を引用して注を加えた仏典音義だと考えられている⁽¹⁾。奥書には大治四年（一一二九年）書写の識語があり、重要文化財に指定されている。撰者は未詳である。

『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（文化庁文化財保護部美術工芸

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

課刊）によってその書誌を紹介すれば以下のようである。

〔縦〕 二六・一、第二紙長、五四・四、十四紙、卷子製、表紙

薄茶地楮紙

料紙楮斐交漉紙、墨界（界高二四・二、界中二・〇五）

〔外題〕 相好文字抄、如来蔵書（本カと添字あり）

〔本文〕 一行あたり十九〜二十一字、一枚二十七行、本文同筆

ニテ墨傍訓、送仮名、声点、校合、紙背加筆アリ

〔奥書〕 大治四年九月九日未時計書畢、執筆最實

〔別筆〕 「二交了仁融」（又別筆）、「同十二月十一日移點了」

〔時代〕 平安後期（大治四年）

〔本文中〕 大般若経音訓（小島真興撰）、類聚抄（和名類聚

抄）、唐韻、玉篇等の引用極メテ多シ

なお、我々の調査によって包紙には『相好文字抄下』と記されていることが確認された。「下」があれば『相好文字抄上』も存在すると考えるのが普通だが、『相好文字抄上』なる典籍は今のところその存在が知られていない。「下」という文字は後世に付加された可能性もある⁽²⁾。従って、本稿では『相好文字抄下』と記さずに『相好文字抄』と記す。

本書は注文中に、国語学・中国語学上重要な典籍の佚文（『切韻』・『唐韻』・『大般若経音訓』・元興寺信行撰述の典籍等）を多数含むために佚文收拾の好資料として扱われることが多いが、本書それ自体がどのような典籍であるのかについては、ほとんど論じられたことはなかった。

本書についてある程度詳しく述べたものとしては、管見に入つた限りでは、築島裕が「この本（『相好文字抄』、筆者注）は、仏の八十相好を現す文字について、諸書を引用して説明を加えたもので、多分院政期のものと思われる」、「如来の相好ということは他の經典にも見えることだが、取分け大般若経にはその記事が著しく『大般若経三十二種好八十相好』という独立した書物もあるほどなので……（以下略）」と述べているのみである。⁽⁴⁾

本稿の目的は『相好文字抄』における相好語のあり方を手がかりとして『相好文字抄』が如何なる書であるかを述べ、さらにそれらの相好語がどのような典籍からどのように引用されたのかを具体的に指摘することである。

なお、今回の研究にあたり、来迎院御住職、齋藤孝圓氏のご厚意によって、筆写および調査を行うことができた。記して深く感謝申し上げる。

二、相好とは何か

まず最初に問題となるのは『相好文字抄』に冠せられた「相好」という語である。「相好」なる語については『相好文字抄』の冒頭部分に以下のように記されている。（注……「」は、傍注・ふりがな・送りがなを示す。句点は筆者。以下同じ。）

大般若音訓云相好上「ハ」去聲謂相見也。即三十二相也。下「ハ」上聲陸□法「人」云美也善也。即八十随好也。

この記述によれば、「相好」とは仏の三十二相と八十随好であ

ることが分かる。それでは相好・三十二相・八十随好とは何か。具体的に説明すれば以下のようなのである。

相好とは、仏や如来の身体に具わる三十二相と八十随好の吉相の総称である。

三十二相とは、三十二大人相などともいい、仏や如来の身体に具わる三十二の顕著な吉相のことである。例えば「眉間白毫相（眉間には白い柔らかい毛がありその毛は右旋している）」「眼睫如牛王相（瞳は紺碧であり睫毛が牛王のような姿をしている）」「咽中津液得上味相（最大の味感を有しており、唾液ですべての味をうまくすることができ）」などの仏の顕著な身体的特徴をさす。⁽⁵⁾

一方、八十随好とは八十随好形、八十種好、八十種妙好などともいい、仏や如来の身体に具わる八十の微妙な吉相のことである。例えば、「面門から常に最上特殊の香りをだす」「身体は長大であり端直である」「歯が方正で鮮白である」などの仏の微妙な身体的特徴をさす。岡田行弘によれば八十随好は三十二相を補充するものであつて、八十随好全体の価値は三十二相の一つの大人相の価値より低いという。⁽⁶⁾

三十二相と八十随好の、仏典における記載のあり方については、次の（一）～（三）のような特徴があるとされる。

（一）三十二相と八十随好は、ある特定の仏典のみに記載されているのではなく多様な仏典に記載されている。

例えば、三十二相は、

『華嚴經』第二十五、『大智度論』第四、『大般若經』第三百八十一・第五百七十三、『大乘百福莊嚴相經』、『方廣大莊嚴經』、『觀佛三昧海經』第一至第四、『瑜伽師地論』第四十九、など、

また、八十随好は、

『舊華嚴經』第二十五、『大毘婆沙論』第百七十七、『大般若經』第五百七十三、『无上依經』卷下、『瑜伽師地論』第四十九、『大智度論』第二十六・第二十九・第八十九、『俱舍論』第十八、など、

両者ともに多様な仏典に記載されている⁽⁷⁾。

(二) 三十二相と八十随好の、諸仏典における記載量には多寡の差がある。

岡田行弘によれば、八十随好は、漢訳仏典中において全部で十八のテキスト(二十一箇所)に記載されているが、三十二相の記載は、これよりはるかに多く、その量は八十随好の五倍程度である⁽⁸⁾。

(三) 三十二相と八十随好の、諸仏典における順序やそのあり方は同一ではない。

この点について、岡田行弘は次のように述べる。

三十二大人相の場合にも「何をもって三十二の相とするか」という選択は各経論において若干の相違が存在していたのであるが、八十随好においては随好を選択するという問題は、その数の拡大にともなって一層複雑化している。八十という

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

数を満たすために各経論は三十二大人相との類似・重複とか配列の不自然さ、同内容の特徴の反復というようないくつかの問題点も残している⁽⁹⁾。

これは、例えば、『大智度論』第八十八では、

二十九者眼色如金精。三十者眼睫如牛王。三十一者眉間白毫相柔白如兜羅綿。三十二者頂髻肉成。

と記載されているのに対して、『瑜伽師地論』第四十九では

二十九者其目紺青。三十者睫如牛王。三十一者其頂上現鳥毳膩沙。三十二者眉間毫相其色光白螺文右旋。

と記載されているが如き例をいう⁽¹⁰⁾。つまり、三十二相の順序や

記述のあり方は諸仏典において同一ではないのである。

また、『相好文字抄』に先行する『往生要集』巻中には「是諸相好。行相利益廢立等事。諸文不同。」⁽¹¹⁾とあり、この記述からも相好の順序などについて諸仏典は同じではなかったことが分かる。

以上の内容を要約すると次のようである。

①相好とは、仏や如来が具えている三十二相と八十随好の吉相のことであり、仏や如来の顕著な特徴を三十二相といい、補完的な特徴を八十随好という。八十随好全体の価値は、一つの三十二相より低い。

②相好は様々な經典に記載されているが、各々の相好の順序、名称、および記述のありかたは諸經典によって違う。

三、相好語への加注にみられる『相好文字抄』の編纂目的

次に『相好文字抄』においてこれらの相好語にどのような注が加えられているのかについて述べる。まずはじめに冒頭部分を例として示す。〔一〕は出典注。〔一〕は傍注・ふりがな・送りがな。《》は割り注。ーは、おどろ字。声点は省略した。太線は筆者。(○行目)は本文における位置。)

・【大般若音訓云】相好上〔ハ〕去聲謂相兒也。即三十二相也。下〔ハ〕上聲陸□法〔人〕云美也善也。即八十随好也。

・【大般若經云】有白毫相。^A【音訓云】毫胡力反。【玉篇云】長毛也。或作「レリ」豪。【王逸】「人」云「銳」【エイ トキ】毛也。今案二形通用之。(四行目)

・【大般若經云】如觀羅綿。^B【音訓云】堵羅綿上都古反。或作都或作兜。下弥連反。亦作繇。【釈氏云】絮「シヨ タ」也。〔一〕音序「《似綿而龜惡也》」【行瑠「タウ」云】「ー」者細綿也。今案堵羅「ハ」梵語。綿「ハ」唐言也。

・【法華攝釋云】都羅綿者都羅樹名此「ココニ」无相「ヒ」當「アタルモノ」故不譯也。綿從樹出名「ー」。如言柳絮「依柳出得柳絮名。(六行目) …… (中略) ……」

・【无上依經云】右旋上靡。^C【大般若音訓云】靡文彼反。【行

瑠云】偃「エン」順之状也。又元也。非此用矣。(十六行目) …… (中略) ……

・【大般若云】光潔晃曜。【音訓云】晃曜上胡廣反。【孫愐云】明也曜也。下以照反。【陸法云】照也。(二十六行目)

・【同經云】金臺。【法華慈恩音訓云】臺徒来反。尔疋「ニハ」四方「ニシテ」而高曰「一」。《類聚臺和名字天奈》。(二十八行目)

・【同經云】勁及雙肩。【玉篇云】頸吉郢切。【說文云】頭莖也。又云雙所江切。兩也。偶「クウ」也。又飛鳥二枚也。

・【音訓云】肩古賢反。【孫愐云】頂上也。膊也。(三十行目)

例えば、傍線部A「大般若經云有白毫相」、傍線部B「大般若經云如觀羅綿」、傍線部C「无上依經云右旋上靡」のような記述から分かるように、本書においては『大般若經』や『无上依經』等から「有白毫相」や「如觀羅綿」「右旋上靡」などの相好語を引用している。同名の經典が続く場合は「同經云」として固有名を省略している(詳しくは〈表一〉を参照)。本書に引用された相好語は全部で一三七語である。そしてこれらの相好語には各種典籍から引用された注が加えられている。

ここで重要なことは、これらの注のほとんどは、中国の小学書(『玉篇』『切韻』等)や仏典音義(『大般若經音訓』『行瑠音義』『女應音義』等)や、義疏(『法華經玄贊撰釋』『法華經玄贊』)か

ら引用された小学的な注であるということである。例えば、傍線部Aの「有白毫相」の条文では、まず「毫胡力反」という音注、「長毛也」「鋭毛也」という義注、さらに「或作豪」という字体注や「今案二形通用之」という字体に関する案語などが収録されている。換言すれば、仏教教義的な注はほとんどみられないということである。

このような点からみれば、『相好文字抄』は、仏典音義というよりも、様々な仏典から相好語を取り上げて主として小学的な注を加えることを目的とした一種の「仏典辞書」、特に「相好語辞書」のようなものとして編纂されたと考えられる¹²⁾。

四、『相好文字抄』における相好語の出典

ところで、『相好文字抄』の一二七語の相好語は具体的にどのような仏典から引用されているのだろうか。その全体像を〈表一〉として示す。

〈表二〉の「引用經典名」の項目には「大般若經」云「无上依經云」のように当該相好語の出典となった經典名を記した。「相好語」の項目には、「有白毫相」「右旋上靡」のように、これらの經典から引用された相好語を記した。^{*}印のあるものは表末の注を参照。「序数」は『相好文字抄』に出てくる順序による序数である。また、「同經云」のように固有名を挙げていない出典注については、例えば「同經（大般若）云」のように具体的な經典名を補った。なお、この序数のひとつひとつが三十二相八十種好の相

好の一つ一つに対応しているとは限らない。例えば、2番「有白毫相」、3番「如觀羅綿」、4番「逾珂雪等」の三つを併せて一相である。（後述の〈表二〉参照。）

〈表一〉

序数	引用經典名	相好語
1	大般若音訓云	相好
2	大般若經云	有白毫相
3	大般若經云	如觀羅綿
4	大般若經云	逾珂雪等
5	无上依經云	右旋上靡
6	六波羅蜜經云	婉轉右旋
7	六波羅蜜經云	頗胝迦宝
8	大般若云	光潔晃曜
9	同經（大般若）云	金臺
10	同經（大般若）云	頸及雙肩
11	瑜伽論云	及項
12	十住論云	兩掖
13	百福莊嚴相經云	缺減
14	尼乾子經云	高峻
15	大般若云	膊腋
16	大般若云	充實

来迎院如来藏所藏の『相好文字抄』について

38	又（觀佛經）云	副稱
37	同經（觀佛經）云	鈎鎖骨槃龍結
36	觀佛經云	金色艷
35	同經（最勝王經）云	項背
34	最勝經（最勝王經）云	赫奕
33	般若經（大般若）云	一尋
32	觀佛經云	缺盆骨
31	般若經（大般若）云	威嚴
30	十住論云	廣厚得所
29	同經（大般若）云	領臆
28	同經（大般若）云	如諾瞿陀
27	同經（大般若）云	縱廣
26	同經（大般若）云	離翳
25	大般若云	仙王
24	十住論云	七肘
23	伽論（瑜伽論）云	僂曲
22	同經（大般若）云	洪滿
21	大般若云	容儀
20	伽論（瑜伽論）云	項脊
19	同經（觀佛經）云	脇肋
18	觀佛經云	跂腋
17	觀佛經云	摩尼珠

60	同經（大般若）云	詞韻和雅*
59	同經（大般若）云	梵音
58	大般若云	能覆
57	同經（觀佛經）云	咽嚥
56	同經（觀佛經）云	適舌根上
55	觀佛經云	流注
54	无上依經云	咽喉
53	又（大般若）云	身心適
52	又（大般若）云	津液
51	同經（大般若）云	吞咽
50	同經（大般若）云	擁曲*
49	同經（大般若）云	延縮
48	同經（大般若）云	喉脉
47	同經（大般若）云	鮮白鋒利
46	大般若云	四牙
45	觀佛經云	下斷
44	同論（瑜伽論）云	齟齬
43	瑜伽論云	上下齒臺
42	同論（十住論）云	蜜緻
41	十住論云	君垣華
40	最勝經（最勝王經）云	拘物頭華
39	大般若云	淨蜜

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
同経（大般若）云	同経（大般若）云	同経（大般若）云	同経（大般若）云	大般若云	觀佛經云	无上依經云	又（百福經）云	又（百福經）云	百福經云	觀佛經云	同経（大般若）云	同経（大般若）云	同経（大般若）云	大般若云	十住論云	无上依經云	又（大般若）云	又（大般若）云	又（大般若）云	又（大般若）云	又（大般若）云
頻蹙	熙怡	含笑先言*	舒泰	天帝弓	雙眄	眼瞼	含羣	婉麗	紺艷	俱陶	皎潔	紅環	紺青	眼睛	希疏	紺炎	眼睫	和悦與言	如頻迦音	婉約	洪震

104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83
无上依經云	同経（大般若）云	大般若經云	大般若云	觀佛經云	大般若云	瑜伽云	大般若云	報恩經云	同経（觀佛經）云	觀佛經云	最勝王經云	大般若云	同経（觀佛經）云	觀佛經云	同経（觀佛經）云	同経（觀佛經）云	同経（觀佛經）云	觀佛經云	同経（大般若）云	同経（大般若）云	同経（大般若）云
涌起	天蓋	烏瑟膩沙	額廣	擾生*	綺靡	角鬢	輪埵	頰車	鷹王鳴	當于	如載金鋌	且直	蜉斗	髭鬢	如頻婆菓	丹暉	兩吻	師子欠相	面門	好巡奮處	常少

126	同經（大般若）云	庠序
125	同經（大般若）云	庠審
124	同經（大般若）云	怯弱
123	同經（大般若）云	敦肅
122	同經（大般若）云	諸竅
121	大般若云	敦重
120	同經（觀佛經）云	如脂
119	觀佛經云	間錯
118	无上依經云	那羅延
117	乾子經（尼乾子經）云	鉤鎖
116	大般若云	支節
115	无上依經云	脈理
114	同經（大般若）云	盤結
113	大般若云	筋脈
112	乾子經（尼乾子經）云	繖蓋
111	大般若云	末達那
110	无上依經云	无胈
109	同經（觀佛經）云	頂腦
108	同經（觀佛經）云	金剛
107	觀佛經云	合拳*
106	智論云	如捲*
105	同經（无上依經）云	成髻

137	大般若云	轉範*
136	无上依經云	剛彊
135	大般若云	逶迤
134	大般若云	随轉
133	尼乾子經云	炳着*
132	大般若云	四指量
131	同論（瑜伽論）云	埴瓦
130	同論（瑜伽論）云	礫石
129	瑜伽云	轉側
128	同經（无上依經）云	迴如
127	无上依經云	斜戾

〔注記〕

- ・ 50 大般若經中では「癰曲」とある。
- ・ 60 大般若經中では「詞韻弘雅」とある。
- ・ 80 大般若經中では「念笑先言」とある。
- ・ 100 觀佛經中では「卷生」とある。
- ・ 106 大智度論中では「如拳」とある。
- ・ 107 觀佛經中では「含捲」とある。
- ・ 133 尼乾子經中では「炳著」とある。
- ・ 137 大般若經中では「軌範」とある。⁽¹³⁾

〈表一〉によれば『相好文字抄』においては、その収録している相好語全百三十七例のうち六十六例を『大般若經』⁽¹⁴⁾から引用し

ていることが分かる。六十六例は全体の約四十八%にあたり最も多い。次に多く引用されるのが『観佛經』の二十七例で、全体の約二十%である。両者を合わせると全体のほぼ七割を占める。それ以外の經典は『无上依經云』が十二例、『瑜伽論』が九例、『十住論』が六例、『尼乾子經』、『最勝王經』、『百福莊嚴相經』が各四例ずつ、『六波羅蜜經』が二例、『大般若經音訓』、『報恩經』、『大智度論』が各一例ずつである。

以上のことから『大般若經』と『観佛經』が『相好文字抄』中の相好語の主要な出典であることが分かる。

前述したように相好語を記載した仏典は多様である。それでは、なぜ『相好文字抄』では『大般若經』と『観佛經』から相好語が多く引用されているのであろうか。

その理由は以下のものであると考えられる。

周知のとおり『大般若經』は大乗仏教の根本經典であり、なかでも玄奘訳の『大般若經』は、数ある般若經典類のなかで最も完成した經典であるとされている。このため玄奘以降の漢訳者は玄奘訳の『大般若經』中の記述を忠実に継承している。⁽¹⁵⁾したがって、玄奘訳の『大般若經』以後に撰述された仏書が相好を記述する場合には、当然のことながら玄奘訳の『大般若經』を重視すると考えられる。また、『観佛經』は仏道修行における「観佛」⁽¹⁶⁾にとって重要な經典である。相好において両書を重視することは、『往生要集』にも、「然今三十二略相、多依大般若、廣相随好、及諸利益、依観佛經」、すなわち「今三十二の略相は多く大般若經

により、広相と随好及び諸々の利益とは観佛經に依る」⁽¹⁷⁾とあることから明らかである。まさにこの記述のとおり、本書はその相好語の多くを『大般若經』と『観佛經』から引用しているのである。

ところで、『相好文字抄』は『大般若經』のどの箇所から相好語を引用しているのだろうか。『大般若經』は大部な經典であるが、実は、相好の記載は複数の箇所集中しているので、引用箇所を特定することは比較的簡単である。三十二相と八十随好がまとまって記載されている箇所は、①卷第三百八十一（初会、諸功德相品）、②卷第四百六十九から卷第四百七十にかけて（第二会、衆徳相品）、③卷第五百三十一（第三会、妙相品）、④卷第五百七十三（第六会、二行品）、の計四箇所である。⁽¹⁸⁾

ただし同じ順番の相好語（例 第二十五相）であっても、これらの記載箇所によって、その相好語や相好の説明内容が異なっている場合がある。例えば、第二十五相を例にとってこの四箇所における相違を示せば以下のようなものである。

- ①〔卷第三百八十一〕「世尊常得味中上味。喉脉直故能引身中諸支節脉所有上味。風熱痰病不能為雜。由彼不雜脉離沈浮延縮壞損癱曲等過。能正吞咽津液流通流故。身心適悦常得上味。是二十五。」
- ②〔卷第四百六十九品から卷第四百七十〕「如来常得味中上味。是二十五。」
- ③〔卷第五百三十一〕「諸佛常得味中上味。喉脉直故能引身

中千支節脈所有上味。是二十五。」

④〔卷第五百七十三〕「如来常得味中上味喉脈直故。能引身中千肢節脈所有上味。是二十五。」⁽¹⁹⁾

したがって、『相好文字抄』における『大般若経』からの引用部分とこれら四箇所の記載内容とを比較対照すれば、『相好文字抄』がこれらの四箇所のうちのどこから当該の相好語を引用したかを特定できることになる。

両書を比較対照した結果、それは卷第三百八十一であることが判明した。両者がよく一致する実態を〈表二〉として示す。

〈表二〉は、『相好文字抄』において【大般若経】として引用された相好語（表の上段の語）と『大般若経』卷第三百八十一中の三十二相および八十随好の当該の相好語（表の下段の語）とを対照して示したものである。三十二相には※印をつけさらに太枠で囲んだ（それ以外は八十随好）。なお、三十二相の『大般若経』において示されている順番は【】で囲んだ。当該相好語には、太線を付した。最上段の数字は〈表一〉の「序数」である。

〈表二〉

2	有白毫相 ※	世尊眉間有白毫相。右旋柔軟如觀羅綿。
3	如觀羅綿 ※	鮮白光淨逾珂雪等。【是三十一。】
4	逾珂雪等 ※	

8	光潔晃曜 ※	世尊身皮皆眞金色。光潔晃曜如妙金臺。
9	金臺 ※	衆寶莊嚴衆所樂見。【是第十四。】
10	頸及雙肩 ※	世尊兩足二手掌中頸及雙肩七處充滿。【是第十五。】

15	膊腋 ※	世尊膊腋悉皆充實。【是第十七。】
16	充實 ※	

21	容儀 ※	世尊容儀圓滿端直。【是第十八。】
22	洪滿	なし

25	仙王	世尊身相猶如仙王。周匝端嚴光淨離翳。是第二十。
26	離翳	
27	縱廣 ※	世尊體相縱廣量等。周匝圓滿如諾瞿陀。【是第二十。】
28	如諾瞿陀 ※	
29	領臆 ※	世尊領臆并身上半。威容廣大如師子王。【是二十一。】

31	威嚴	世尊身分上半圓滿。如師子王威嚴無對。是四十六。
----	----	-------------------------

33	一尋 ※	世尊常光面各一尋。【是二十二。】
----	------	------------------

64	63	62	61	60	59	58	53	52	51	50	49	48	47	46	39
和悦與言	如頻迦音	婉約	洪震	詞韻和雅	梵音	能覆	身心適	津液	吞咽	擁曲	延縮	喉脉	鮮白鋒利	四牙	淨蜜
	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
世尊音聲不高不下。随衆生意和悦與言。是七十一。	世尊梵音詞韻弘雅。随衆多少無不等聞。其聲洪震猶如天鼓。發言婉約如頻迦音。【是二十七。】					世尊舌相薄淨廣長。能覆面輪至耳髮際。【是二十六。】	世尊四牙鮮白鋒利。【是二十四。】 世尊常得味中上味。喉脉直故能引身中諸支節脉所有上味。風熱痰病不能為難。由彼不雜脉離沈浮延縮壞損癱曲等過。能正吞咽津液通流故。身心適悦常得上味。【是二十五。】								世尊齒相四十齋平淨蜜根深白逾珂雪。【是二十三。】

97	92	85	84	83	82	81	80	79	78	71	70	69	68	65
輪埵	且直	面門	好巡奮處	常少	頻蹙	熙怡	含笑先言	舒泰	天帝弓	皎潔	紅環	紺青	眼睛	眼睫
									※	※	※	※	※	※
世尊耳厚廣大脩長輪埵成就。是四十二。	世尊鼻高脩而且直其孔不現。是三十三。	世尊面門不長不短。不大不小如量端嚴。是二十九。	世尊顏容常少不老好巡奮處。是七十九。			世尊面貌光澤熙怡。遠離顰蹙青赤等過。是五十九。	世尊顏貌舒泰光顯。含笑先言唯向不背。是五十八。	世尊顏貌舒泰光顯。含笑先言唯向不背。【是第三十。】	世尊面輪其猶滿月。眉相皎淨如天帝弓。【是第三十。】	世尊眼睛紺青鮮白。紅環間飾皎潔分明。【是二十九。】				世尊眼睫猶若牛王。紺青齋整不相雜亂。【是二十八。】

125	124	123	122	121	116	114	113	111	103	102	101	99
庠審	怯弱	敦肅	諸竅	敦重	支節	盤結	筋脈	末達那	天蓋	烏瑟膩沙	額廣	綺靡
世尊行步直進庠審如龍象王。是為第七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊雙眉綺靡順次紺瑠璃色。是第四十。		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊額廣圓滿平正形相殊妙。是四十五。		
世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞。是第十九。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世尊頂上烏瑟膩沙高顯周圓。猶如天蓋。		
世尊諸竅清淨圓好。是五十四。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					【是三十二。】		
世尊身容敦肅無畏常不怯弱。是第十七。					世尊筋脈盤結堅固深隱不現。是為第五。					世		

137	135	134	132	126
轉範	透迤	隨轉	四指量	庠序
世尊所為先觀後作。軌範具足令識善淨。是七十六。				
世尊自持不待他衛。身無傾動亦不透迤。是六十九。				
世尊迴顧必皆右旋如龍象王舉隨轉。是第十一。				
世尊行時其足去地。如四指量而現印文。是六十八。				
世尊行步安平庠序不過不減猶和牛王。是為第九。				

この表は以下のことを示している。

例えば、8番「光潔晃曜」と9番「金臺」は、『大般若經』では「是第十四」となっている。つまり、両相好語は『大般若經』では三十二相のうちの「第十四番目の相」として掲載されているものから引用されたことがわかる。以下、同様に10番「頸及雙肩」は「第十五相」から、15番「髀腋」と16番「充實」は「第十七相」から、というように引用され、102番「烏瑟膩沙」103番「天蓋」の「第三十二相」から引用されたものまでが『相好文字抄』に収録されている。

これらの相好語は22番「洪滿」の一例を除いて、『大般若經』卷第三百八十一の相好語と極めてよく一致している。前述の第二十五相を例にとれば、48番「喉脉」から53番「身心適」の六例の相好語は、卷第三百八十一には記載されているが他の三箇所には記載されていないものであり、『相好文字抄』がこれらの語を卷第三百八十一から引用したことを明確に示している。

また『相好文字抄』に収録されている三十二相の相好語のうち、「第三十一相」が冒頭におかれていることと、第十六相と第十九相が引用されていないことを除けば、第十四相から第三十二相までは『大般若經』卷第三百八十一の記載順序に従って規則正しく引用されていることが分かる。

以上の理由により、『相好文字抄』中の『大般若經』とは『大般若經』卷第三百八十一をさしていると考えられる。なお、第一相、第十三相、第十六相、第十九相が引用されていない理由については、残念ながら現時点では不明である。

ところで、三十二相の引用状況とは異なり、八十随好は『大般若經』卷第三百八十一記載の順序通りには引用されていない。例えば、79番「舒泰」は「世尊顏貌舒泰光顯。念笑先言唯向不背。是五十八。」から引用され、85番「面門」は「世尊面門不長不短。不大不小如量端嚴。是二十九。」から引用されているが如くである。

八十随好にこのような引用順序の違いがあるのは、三十二相の語の内容にあわせて、それに関係のある八十随好を適宜抜粋して

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

掲載したからだと考えられる。例えば、〈表二〉において59番「梵音」から63番「如頻迦音」までの「第二十七相」は「阿弥陀仏の声」という身体的特徴であるため、この直後に、八十随好の中の同様の身体的特徴である64番「和悦與言」を、「第七十一随好（世尊音聲不高不下。随衆生意和悦與言。）」から抜粋して追補したものと考えられる。前述したように、同じ相好語ではあっても、八十随好は三十二相の補完的な特徴として扱われているので、このような掲載のあり方はこの特徴とよく整合している。

ただし、八十随好も、三十二相の場合と同様に、『大般若經』卷第三百八十一から全ての随好が引用されているわけではない。

本章の内容を要約すると

- ①『相好文字抄』はその相好語の多くを『大般若經』と『觀佛經』から引用している。
 - ②『大般若經』から引用された相好語は、同書の卷第三百八十一から集中的に引用されている。
 - ③ただし三十二相八十随好の全ては引用されていない。具体的には、三十二相の「第一相」から「第十三相」までと、「第十六相」および「第十九相」は引用されていない。
 - ④三十二相は『大般若經』卷第三百八十一の三十二相の順序にほぼ従っているのに対して、八十随好はその順序に従わず、三十二相を補完する形でその説明にあわせて適宜引用されている。
- ということである。

五、結語

本稿の結論をまとめれば以下のようである。

来迎院如来蔵『相好文字抄』は、諸仏典から相好語（阿弥陀仏をはじめとする諸仏の特徴である相好すなわち三十二相と八十随好）を取り上げ、小学的な注を加えた一種の仏典辞書、特に「相好語辞書」のようなものであると考えられる。とりわけ、『大般若波羅蜜多經』全六百巻中の巻第三百八十一から相好語を集中的に引用しており、それらは本書における相好語引用のほぼ半数を占める。ただし、三十二相と八十随好の全ては引用されておらず取捨選択が行われている。

注

- (1) 吉田金彦「辞書の歴史」（講座『国語史3 語彙史』所収、大修館書店、一九七一年）。および、築島裕「古代日本語発掘」（学生社、一九七〇年）。
- (2) 包紙にのみ『相好文字抄「下」』とあることについては、御住職の斎藤氏から「江戸時代に如来蔵の整理、移動があった時に付けられた仮題ではないか」とのご指摘をうけた。
- (3) 上田正「切韻逸文の研究」解説篇（汲古書院、一九八四年）、三保忠夫「元興寺信行撰述の音義」（『国語と国文学』第五十一巻 第六號、一九七四年）、築島裕「真興撰述大般若經音訓について」（『長澤先生古稀記念 圖書學論集』所収、三省堂、一九七三年）、築島裕

「大般若經音義諸本小考」（『東京大学教養学部人文科学紀要第二十一輯、一九六〇年』など）。

- (4) 築島裕（注（一）前掲書）を参照。なお、同氏より「当時、観智院には『大般若經三十二相八十随好』なる典籍が存在しており、この典籍には喜多院点が付され、明らかに法相宗と関係がある。『大般若經』の相好は、単に天台宗だけでなく法相宗も関心が深いテーマではなかったか」との指摘を一九九六年五月の訓点語学会にて頂いた。これらの点については以下のように考える。すなわち、法相宗の学僧は『大般若經』中の三十二相と八十随好を単に知っていたということであり、直ちに法相宗の教義には結びつかないのではないということである。なぜならば『摩可止観』に代表されるように実践をも重んじる天台宗においては、相好業のような「行」は重要な意味を持つのに対して、唯識の道理を明かす法相宗にとっては、たとえ仏の相好に関心があつたにしても、法相宗の教義と、念仏や観仏という実践的な「行」とは直ちに結びつかないからである。なお、興福寺からは「法相宗には、天台宗の相好業に相当するような「行」はない」とのご教示をいただいた。また、『相好文字抄』は、『元興寺信行の典籍』、真興撰『大般若經音訓』、『法華經玄贊撰釋』等、法相宗関係の典籍から多く引用しているが、このことを以て『相好文字抄』が天台宗ではなく法相宗に関連のある典籍であるとはいえない。なぜならば、天台宗の僧侶が法相宗の典籍を、法相宗の僧侶が天台宗の典籍を引用しても不思議ではないからである。例えば、『法華經釋文』は興福寺の僧、中算撰であり、法相宗の書物であることは明らかであるが、その注文においては、「天台云」として天台宗関係の典籍を教義とは関係なく引用している。（西原一幸・河野敏宏・顧国玉『妙法蓮華經釋文』引用の典籍（二）——所引典籍の全体構造——）一九九一年、「金城学院大学論集」国文学篇三十三号）。つまり、天台関係の典籍が引用さ

れることを以て『法華經釋文』が天台関係の書物であるといわれないのと同じように、『相好文字抄』が法相宗関係の典籍から多く引用していることを以て、法相宗に関連のある典籍であるとは一概にはいえないのである。

- (5) 望月信亨『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九五四～一九六三年）等による。

- (6) 岡田行弘「八十随好」（『我』の思想（前田専学博士還暦記念論集）所収、春秋社、一九九一年）による。

- (7) 望月信亨 前掲書による。

- (8) 岡田行弘 前掲論文による。

- (9) 岡田行弘 前掲論文による。

- (10) 望月信亨 前掲書による。

- (11) 『大日本仏教全書』第三十一（復刻版）所収の「往生要集」六〇頁（名著普及会、一九七八年）による。

- (12) また、『相好文字抄』は、特定のテキストに密着した注釈書とはいえない点からも、「音義書」ではないと考えられる。

- (13) 以上の表記は「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2012」の検索結果による。

- (14) 「大般若經（『大般若波羅蜜多經』）」のテキストは『大正新修大藏經』第五卷～第六卷を用いた。

- (15) 岡田行弘 前掲論文による。

- (16) 「観佛經」は『観佛三昧海經』の略称。『観佛經（観佛三昧海經）』についての『仏書解説大辞典』の解説は以下のとおりである。「全十卷。観佛三昧經ともいう。佛陀跋陀羅が東晋時代の隆安二年（三六九）から永初二年（四二一）において譯出。」その内容は「佛を觀じ佛を念ずるには如何にすべきかを詳叙し、且つその殊勝なる功德を敷衍するもの」とあり、また、「經中には三十二相、八十随好が列ねら

来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について

れ順觀法そして逆觀法の両様の觀法等が擧げてある」とある。なお『観佛三昧海經』のテキストとして『大正新修大藏經』第一五巻を用いた。

- (17) 『大日本仏教全書』第三十一「往生要集」六〇頁。

- (18) 『大般若經（大般若波羅蜜多經）』の卷第三百八十一は『大正藏』六卷九六八頁以下、卷第四百六十九から卷第四百七十に至る箇所は『大正藏』の七卷三七七頁以下、卷第五百三十一は『大正藏』の七卷七二六頁以下、卷第五百七十三は『大正藏』の七卷九六〇頁以下、の箇所を各々参照した。

- (19) これらの記述から、巻によって、「世尊」「如来」「諸佛」など、仏の名称が異なっていることや、その注釈に違いがあることが知られる。つまり、『大般若經』というひとつの經典内においても相好の記述は同一ではなくバリエーションがあるということである。

- (20) 22番「洪満」は、卷第三百八十一では「円満」と記載されているのに対し、他の三箇所では「洪満」と記載されている。

- (付記) 本稿は一九九六年五月の訓点語学会（於青山学院大学）で発表した草稿に加筆訂正を加えたものである。なお、本稿をなすにあたっては、西原一幸氏から貴重な助言を頂いた。記して深く感謝申し上げます。

執筆者紹介

田 中 泰 賢 (本学名誉教授 …… 英 語)
TANAKA Hiroyoshi

Heather DOIRON (本学外国人教師 …… 英 語)

文 嬉 眞 (本学准教授 …… 韓 国 語)
MOON Hijin

金 美 淑 (本学非常勤講師 …… 韓 国 語)
KIM Misook

南 部 忠 明 (東海高等学校教諭 …… 日 本 語 学)
NAMBU Tadaaki

河 野 敏 宏 (本学教授 …… 文 学)
KONO Toshihiro

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 河 野 敏 宏 (副会長) 有 馬 義 康

(会計) 野 田 大 志

青 山 健 太	有 馬 義 康	※梅 田 豊
※北 村 伊 都 子	※柴 田 哲 雄	杉 浦 克 哉
塚 本 早 織	※虎 澤 慶 太	※中 村 綾
※野 田 大 志	※福 山 悟	※山 口 均

※本号編集委員

編 集 後 記

『教養部紀要』第67巻第1、2合併号をお届けいたします。今年度は第1号を刊行することができず、合併号発行の運びとなりましたが、本号には多様な分野からご投稿頂き、論文4本を掲載することができました。執筆者の先生方、並びに編集に携わって下さった先生方に厚く御礼申し上げます。

新元号になり初めての『教養部紀要』です。新しい時代にも本学教養部の研究が多岐にわたり発展を続けることを祈念しております。(中村記)

愛知学院大学教養教育研究会会則

- 第 1 条 本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。
- 第 3 条 本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。
- 第 4 条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正 会 員 本大学の教養部専任教員とする。
 - (2) 準 会 員 本大学の在学生とする。
 - (3) 賛助会員 本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。
- 第 5 条 本会は第 3 条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行
 - (2) 研究会、講演会、討論会等の開催
 - (3) その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業
- 第 6 条 「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年 3 回発行し、会員に配布する。
- 第 7 条 本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。
- (1) 会 長 1 名
 - (2) 副 会 長 1 名
 - (3) 委 員 12 名
 - (4) 会 計 1 名
- 2 会長は学長これを委嘱する。
 - 3 委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第 1 外国語・第 2 外国語および健康総合科学の各系列より 2 名あて選出する。委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 4 副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。
- 第 8 条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 2 副会長は会長を補佐し、会務を掌る。
 - 3 委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。
- 第 9 条 会長は委員会を招集し、その議長となる。
- 第 10 条 会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。
- 第 11 条 会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。
- 2 新入会員は入会金を納付するものとする。
- 第 12 条 本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 13 条 本会の会計は 4 月に始まり、翌年 3 月に終る。
- 第 14 条 本会の会則の改正は正会員の 3 分の 2 以上の賛成をもって成立する。
- 付 則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年6月17日に改正し、即日施行する。
本会則は、昭和63年4月1日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成2年7月6日に改正し、同年4月1日より施行する。
本会則は、平成8年7月19日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。
本会則は、平成27年4月1日に改正し、即日施行する。

愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規程

1988年4月1日成立・実施

〔投稿資格〕

第 一 条 この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。

〔転載の禁止〕

第 二 条 他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。

〔原稿の形式〕

第 三 条 投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。

- (1) 原稿は、電子媒体による入稿とする。(プリントアウトを1部添付する)
- (2) 原稿の量はおおむね16,000字以内とする。
- (3) 本文の前に、別紙で、次の3項を次の順序で付する。
 - (i) 和文の題目および執筆者名。
 - (ii) 欧文の題目および執筆者名。
 - (iii) (イ) 論文・資料・翻訳・書評などの区別
(ロ) その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。
ただし、ここにいる専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の5部門に区別する。
 - (iv) 教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別
- (4) 図・表・写真は、印刷するのに十分な画質のもの（原則としてモノクロ）を、本文の該当箇所に挿入する。

〔原稿の申込み〕

第 四 条 投稿希望者は、教養教育研究会委員会（以下、委員会と称す）の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。

ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。

〔提出期限〕

第 五 条 投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。

〔原稿組版の制限〕

第 六 条 図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集

責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第 七 条 投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校 正〕

第 八 条 校正は原則として第 3 校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第 九 条 抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各 1 篇につき 50 部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50 部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第 十 条 この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付 則

- 一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の 3 分の 2 以上の賛成を要する。
- 二、本規定は、1988 年 4 月 1 日に成立し、即日施行する。
- 三、本規定は、1996 年 7 月 19 日に改正し、即日施行する。
- 四、本規定は、1999 年 12 月 17 日に改正し、翌年 4 月 1 日より施行する。
- 五、本規定は、2003 年 11 月 21 日に改正し、即日施行する。
- 六、本規定は、2005 年 4 月 22 日に改正し、即日施行する。
- 七、本規定は、2007 年 11 月 16 日に改正し、即日施行する。
- 八、本規程は、2018 年 9 月 21 日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010. 7. 16）

- 第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
 - (1) 正会員との共同執筆による投稿
 - (2) 正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
 - (3) 元正会員で、本務校をもたない人の投稿
- 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。
- 投稿原稿の掲載に際しては、(1)の場合の原稿料は 1 篇分とし、(2)(3)の場合の原稿料は支払われない。また、(1)(2)(3)いずれの場合も抜き刷り 50 部までは無料とする。
- 投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要事項を記入のうえ添付して投稿する。
- 投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

●第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

(注) 教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

令和2年1月19日 印刷
令和2年1月27日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢

編集責任者

教養部紀要第67巻

河野敏宏

第1・2合併号(通巻第195号)

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会

〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 〈0561〉(73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社あるむ

電話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.67 No.1, 2
(Whole Number 196)

C O N T E N T S

Articles

Hiroyoshi TANAKA : *Ugetsu-monogatari* by Akinari Ueda and *Nine Stories* by J. D. Salinger (1)

Heather DOIRON : Working with Silence in the Second Language Classroom (19)

Hijin MOON and Misook KIM : Korean Language Learning as a Liberal Arts Subject in Japanese University
—Based on the Questionnaire Results of “Intermediate Class Students”— (25)

Tadaaki NAMBU and Toshihiro KÔNO : “Sôgômozisyô” 『相好文字抄』 in the Possession of
the “Raigôin Nyoraizô” 来迎院如来蔵 (60)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2020